博　多　92

－博多遺跡群第131次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第763集

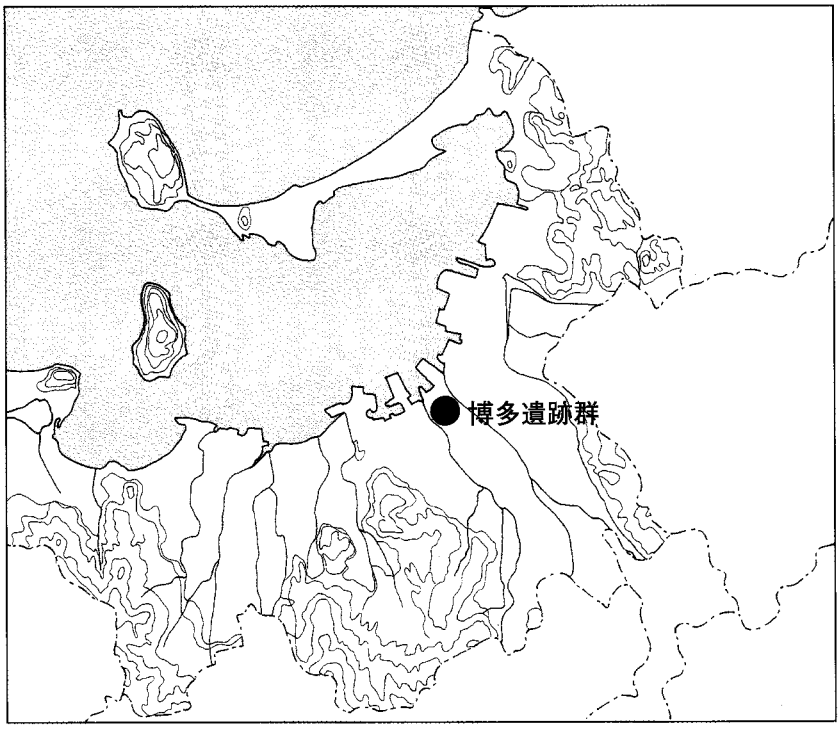
2003

福岡市教育委員会

博多（はかた） 92

－博多遺跡群（はかたいせきぐん）第131次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第763集



遺跡略号　HKT-131

遺跡調査番号　0112

2003

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くより大陸との対外交流の場として栄え、その結果大陸よりもたらされた数多くの文化財が今なお地下に眠っています。なかでも、福岡平野の海岸部に位置する博多遺跡群は、その象徴とも言うべき遺跡で、中世の貿易都市「博多」の姿を今に伝えるものです。

福岡市教育委員会では、この博多遺跡群を保護するとともに、開発によって破壊される場合には事前に発掘調査を実施し、記録の保存に努めています。本書におさめた博多遺跡群第131次調査は共同住宅建設にともない実施したもので、近世から戦前にこの地に存在したと言われる報光寺に関する墓地などを確認することができました。

調査に際し、スエヒロ産業株式会社をはじめ、地元の皆様には快くご理解とご協力を頂き、調査を円滑に進めることができましたことをお礼申し上げます。

調査に関わられた全ての方々に対し、深く感謝申し上げますとともに、この報告書が地域の皆様に幅広く活用され、文化財保護のご理解を深める一助とならんことを願います。

平成15年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　生　田　征　夫

例　言

1．本書は平成13年６月１日から７月23日に福岡市教育委員会が行った、博多区奈良屋町84、85番地所在の博多遺跡群第131次発掘調査の報告書である。
2．発掘調査は共同住宅建設に伴う事前調査として実施した。
3．検出遺構は、小ピットを含め、その性格の如何によらず発見順に３桁の連番号を与え、頭に遺構であることを示す「M」を付けて遺物を取り上げた。本書ではこの番号の頭に遺構の種別を付記し、例「土坑０００」と表記する。
4．本書に使用した遺構・遺物実測図の作製、写真の撮影は、吉武学が行った。
5．本書に使用した図の製図は吉武、上塘貴代子、萩尾朱美、森寿恵が行った。
6．本書に使用した方位は全て磁北である。
7．近世人骨の分析は九州大学大学院比較社会文化研究院の中橋孝博教授にお願いし、玉稿を賜った。
8．動物遺存体の同定は福岡市教育委員会大規模事業等担当の屋山洋が行った。
9．銅銭の透過Ｘ線写真撮影は福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎・片多雅樹による。
10．本書の執筆・編集は吉武が行った。中世陶磁器の一部は「博多出土貿易陶磁分類表」（福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ－博多－福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集　別冊　福岡市教育委員会　1984）の分類により表記した。
11．本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理する。

遺跡調査番号	０１１２		遺跡略号	ＨＫＴ－１３１	
調査地地籍	博多区奈良屋町８４、８５番地		分布地図番号	48　千代博多　0121	
開発面積	４１１㎡	調査対象面積	１９０㎡	調査面積	243.5㎡(一部2面調査)
調査期間	２００１年（平成１３年）６月１日～７月２３日				

本文目次

第一章　はじめに …… 1
　1．調査に至る経過 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
　3．第131次調査地点の位置と周辺の調査例 …… 1
第二章　発掘調査の記録 …… 3
　1．発掘調査の方法と経過 …… 3
　2．基本層序 …… 3
　3．調査の概要 …… 3
　4．主な検出遺構と出土遺物 …… 7
　(1) 溝 …… 7
　(2) 石組遺構 …… 7
　(3) 土坑 …… 11
　(4) 近世墓 …… 20
　(5) その他の遺物 …… 27
　(6) 動物遺存体（屋山洋/福岡市教育委員会大規模事業等担当） …… 30
第三章　おわりに …… 30

付編

福岡市博多遺跡群第131次発掘調査出土の近世人骨　中橋孝博/九州大学大学院比較社会文化研究院

挿図目次

Fig. 1　博多遺跡群の位置（1/25,000） …… 2
Fig. 2　博多遺跡群第131次調査区位置図（1/1,000） …… 2
Fig. 3　土層模式図（1/40） …… 3
Fig. 4　第１面遺構配置図（1/100） …… 4
Fig. 5　第２面遺構配置図（1/100） …… 5
Fig. 6　溝状遺構105実測図（1/40） …… 7
Fig. 7　溝状遺構105出土遺物実測図（1/3） …… 7
Fig. 8　石組遺構019実測図（1/40） …… 8
Fig. 9　石組遺構019掘り方(062)出土遺物実測図（1/3） …… 9
Fig.10　石組遺構080実測図（1/40） …… 10
Fig.11　石組遺構080出土遺物実測図（1/3） …… 10
Fig.12　土坑020実測図（1/40） …… 12
Fig.13　土坑020出土遺物実測図（1/3） …… 13
Fig.14　土坑064実測図（1/40） …… 14
Fig.15　土坑064出土遺物実測図（1/3） …… 14
Fig.16　土坑072・073・079実測図（1/40） …… 15

Fig.17　土坑072・073出土遺物実測図（1/3）……16
Fig.18　土坑079出土遺物実測図（1/3）……17
Fig.19　土坑081・093・108実測図（1/40）……18
Fig.20　土坑081・093・108出土遺物実測図（1/3）……19
Fig.21　近世墓実測図（1/40）……22
Fig.22　近世墓出土遺物実測図・Ⅰ（銅銭は1/1、他は1/3）……24
Fig.23　近世墓出土遺物実測図・Ⅱ（1/3）……25
Fig.24　近世墓出土遺物実測図・Ⅲ（1/3）……26
Fig.25　その他の遺物実測図・Ⅰ（1/3）……27
Fig.26　その他の遺物実測図・Ⅱ（1/3）……28
Fig.27　銅銭（拓影は1/2、透過Ｘ線写真は約1/2）……30

図版目次

Ph. 1　第２面北側調査区全景（南西から）……6
Ph. 2　第１面調査区全景（南西から）……6
Ph. 3　第２面南側調査区全景（南西から）……6
Ph. 4　石組遺構019完掘状況（北東から）……8
Ph. 5　石組遺構019掘り方(062)出土遺物（縮尺不同）……9
Ph. 6　石組遺構080（北東から）……10
Ph. 7　土坑010（東から）……11
Ph. 8　土坑010出土遺物（縮尺不同）……11
Ph. 9　土坑020（南東から）……12
Ph.10　土坑020出土遺物（縮尺不同）……13
Ph.11　土坑064（東から）……14
Ph.12　土坑073出土土器底部の線刻文字……16
Ph.13　土坑108（南から）……19
Ph.14　土坑108出土遺物……19
Ph.15　近世墓の人骨出土状況……23
Ph.16　近世墓出土遺物（縮尺不同）……26
Ph.17　その他の遺物（縮尺不同）……29

表目次

Tab. 1　遺構別銅銭一覧表……30
Tab. 2　銭名一覧表……30

第一章　はじめに

１．調査に至る経過

平成13年、福岡市博多区奈良屋町84、85番地において、スエヒロ産業株式会社による共同住宅建設が計画され、福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（以下「埋文課」）に３月１日付けで埋蔵文化財事前審査申請書の提出があった。申請地は福岡市文化財分布地図上では博多遺跡群に含まれ、かつ近隣地では過去に幾度かの発掘調査も実施しており、遺跡の存在する可能性が極めて高いと考えられた。このため、埋文課では４月３日に試掘調査を実施し、対象地内に設けた１本のトレンチにより地表下130～160cmで整地層および遺構を確認し、この整地層の上下２面の遺構面を対象とした調査が必要となると判断した。埋文課では試掘の結果を踏まえ施工者と協議を持ったが、予定建築物が杭打ちを伴うＲＣ（鉄筋コンクリート）10階建てであるため地下の遺跡への破壊は避けがたい状況にあり、やむなく記録保存のための緊急発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は平成13年６月１日から７月23日に埋文課が受託事業として実施した。また、整理報告書作成は平成14年度に実施した。

２．調査の組織

調査は以下の組織で行った。調査にあたり、委託者であるスエヒロ産業株式会社には条件整備等で多大な協力を頂いた。また、調査中に出土した近代の土製素焼き人形について、太宰府市教育委員会山村信栄氏よりご教示を頂いた。

調査委託　スエヒロ産業株式会社

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　生田征夫

調査総括　埋蔵文化財課長　山崎純男
埋蔵文化財課調査第２係長　力武卓時（前任）、田中壽夫（現任）

調査庶務　文化財整備課　御手洗　清

調査担当　埋蔵文化財課事前審査係　加藤隆也、大塚紀宣（試掘調査担当）
埋蔵文化財課調査第２係　吉武　学（発掘調査担当）

調査協力　石川君子、井口正愛、大庭智子、岡部静江、川崎　良、永隈和代、西野光子、
能丸勢津子、早川　浩、原　範子、宮崎タマ子、山内　恵、山崎光一、渡辺淑子
（五十音順、敬省略）

整理協力　上塘貴代子、下山慎子、萩尾朱美、森　寿恵（五十音順、敬省略）

３．第131次調査地点の位置と周辺の調査例　Fig.1・2

博多遺跡群は、博多湾岸に形成された砂丘と、その後の河川の堆積作用及び人為的な埋め立てにより形成された微高地に立地する。微高地には三つの高まりがあり、陸側のふたつが「博多浜」、海側のひとつが「息の浜」に相当することがこれまでの各方面からの調査で明らかとなっている。第131次調査地点は「息の浜」に含まれ、微高地の尾根を海側に少し越えたあたりに位置しているものと考えられるが、調査区内では基盤砂層にレベル差はなくほぼ平坦である。これまで周辺で実施した調査には、東側に第75・111次調査地点、南東側に第83・116次調査地点、南西にやや離れて第55次調査地点がある。これらの調査では、主に中世後半～近世の遺構を確認した他、第111次調査では

「元寇防塁」の可能性が強い石塁遺構の発見もあった。中世後半では、第111次と第83次調査地点の間を境に溝や建物の方向が異なり、「息の浜」の東西で別方向の町割りが存在した可能性が指摘されている。

Fig.1　博多遺跡群の位置（1/25,000）

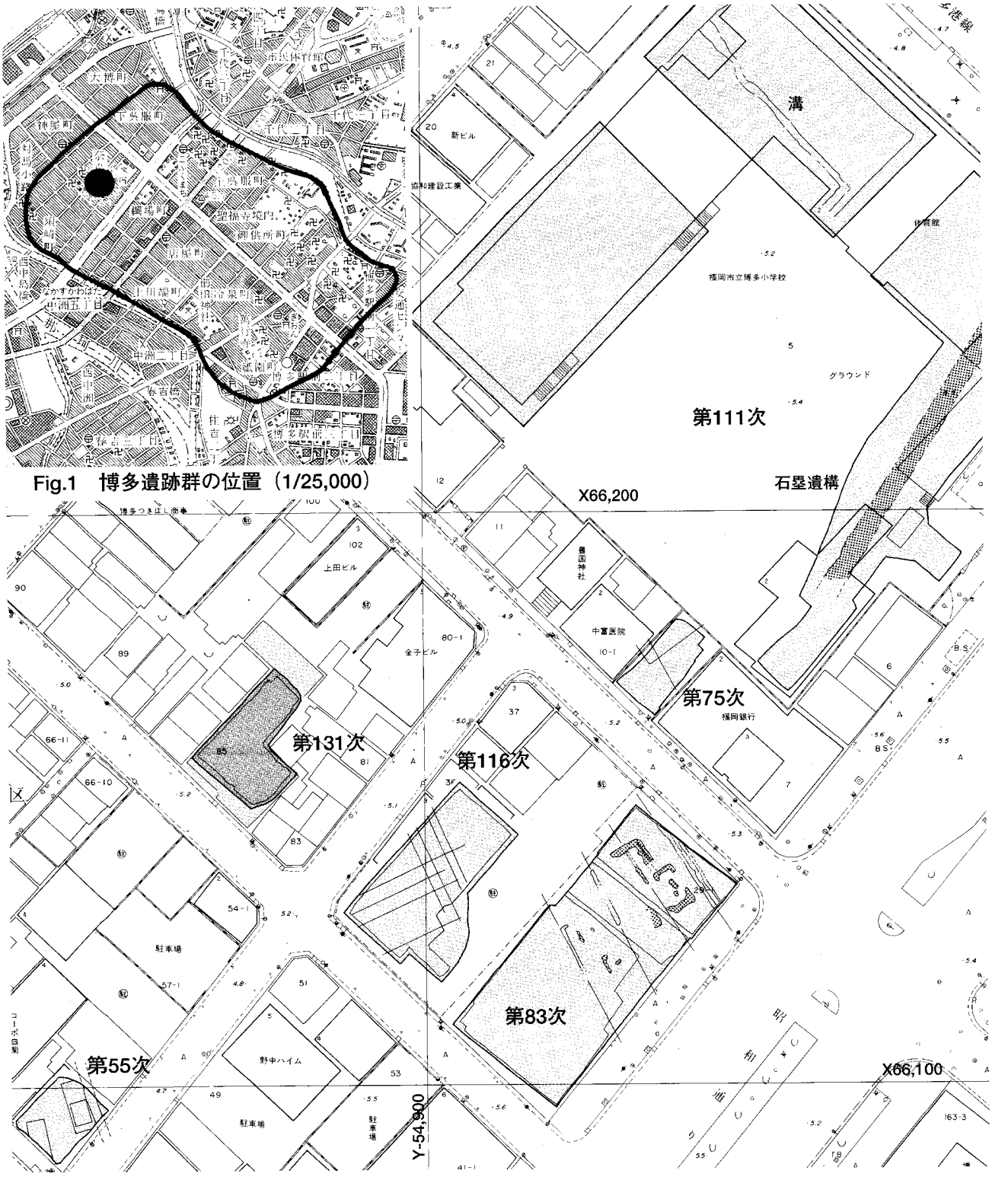


Fig.2　博多遺跡群第131次調査区位置図（1/1,000）

第二章　発掘調査の記録

１．発掘調査の方法と経過

試掘調査により、地表面から130cmまでは表土及び近世の包含層であり、これを除去した灰褐色砂の上面で遺構が検出でき、160cmで基盤土である褐色砂となるという知見が得られた。よって発掘調査は灰褐色砂上と褐色砂上の二つの面を対象として行う必要があった。表土及び近世包含層の除去は委託者から提供された重機により平成13年６月１日から３日に実施し、埋文課調査担当の吉武が立会した。表土を除去した面をそのまま第１面とし、人力による掘削を７日に開始した。調査区は東西に長いＬ字形をなしており、排土を場内処理する関係上、南側の突出部分を排土置き場とし、まず北側の細長い区画に対して調査を行った。北側第１面は20日に全景撮影を行い、25日から第２面への掘り下げを開始した。北側第２面は７月10日に全景を撮影し、13日には排土を移動して南側の調査区に着手した。が、北側の調査結果から、第１面と第２面では時期差が認められず、ともに中世に逆上る遺構がほとんど認められないことが確認できたため、南側調査区では第１面の調査を割愛し、第２面から調査を開始した。南側第２面は19日に全景を撮影し、23日に機材を撤収し、全ての調査を終了した。調査期間全般にわたって雨天の日が多く、かつ予想外の近世墓等を検出したため、調査終了は当初の見込みより１週間程遅れた。

調査に際しては、調査区の形状にあわせて５ｍ方眼のグリッドを任意に組み、北からＡ～Ｄ、東から１～６として包含層出土遺物を取り上げた。また遺構実測の基準線として使用した。その後、『博多地区遺跡基準点測量委託測量成果簿（平成４年３月）』の成果を利用して国土座標（第Ⅱ系）上に位置付けた。標高もこれによる。

２．基本層序　Fig.3

調査開始時に表土層を機械で撤去し、親杭横矢板が設置されたため、土層は観察していない。試掘時の所見によると、地表下130cmの灰褐色砂の直上に焼土塊と近世遺物を含む灰黒色砂が薄く存在するが、これと地表の間は表土・攪乱層であった。表土掘削時に立会して観察したが、コンクリート塊などの建物の解体屑がかなり深くまで埋められていた他、近世のものと思われる墓石（記年銘は確認できない）が散見され、駐車場である現況となる以前は倉庫、その前は墓地であったという近隣住民の話を裏付けた。第１面～第２面間の灰褐色砂は18世紀頃の整地層と考えられる。基盤土となる褐色砂は調査区内では顕著なレベル差は認められず、概ね平坦である。褐色砂には遺物は含まれていなかったが、その上位には黒色バンドが２層認められた。

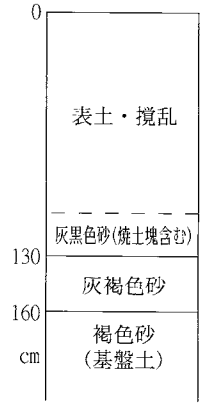


Fig.3　土層模式図（1/40）

３．調査の概要

第１面の概要　Fig.4、Ph.2

北側のみ調査を行った。近代以降の攪乱坑が多く、近世～近代の瓦井戸２、土坑多数、石組の地下室状遺構１、ピット多数を検出した。遺物は18世紀後半以降の桟瓦や陶磁器が出土したが、土坑に廃棄された江戸末の大量の肥前系陶磁器、日露戦争を表現した大正～昭和初期の土製素焼き人形などが特筆すべき遺物として挙げられよう。

Fig.4　第１面遺構配置図（1/100）　※数字は遺構番号

第１面の遺構は一部17世紀に逆上る可能性のある土坑もあるが、大半が18世紀後半～現代のものである。

第２面の概要　Fig.５、Ph.１・３

第１面下約30cmの褐色砂層（基盤土）上の遺構検出面である。18世紀後半以降の大型土坑が多く、それ以前の時期の遺構は断片的に残っているのみである。検出した遺構は、17世紀代の近世墓（木棺、桶など）、17～18世紀代の土坑、石組遺構、ピット、及び中世に逆上る可能性のある溝状遺構などである。18世紀後半以降の大型土坑は一部を完掘したが、調査期間の制約もあり、多くは遺構検出と10cm

前後の掘り下げに留めた。近世墓は調査区の西よりに集中しており、東側には全くない。計16基を近世墓としたが、調査区壁際などにかかったものがもう2基あった。また、土坑とした遺構にも墓が含まれる可能性がある。出土遺物は近世の陶磁器類や瓦が主体を占めるが、これらに混じって中世後半の土師質土器や瓦質土器、13～14世紀代の龍泉窯系青磁・口ハゲの白磁、16世紀代の明代染付なども少量出土している。ただし、確実に中世に位置付けることのできる遺構はなく、溝105、土坑079等にその可能性を残すのみである。

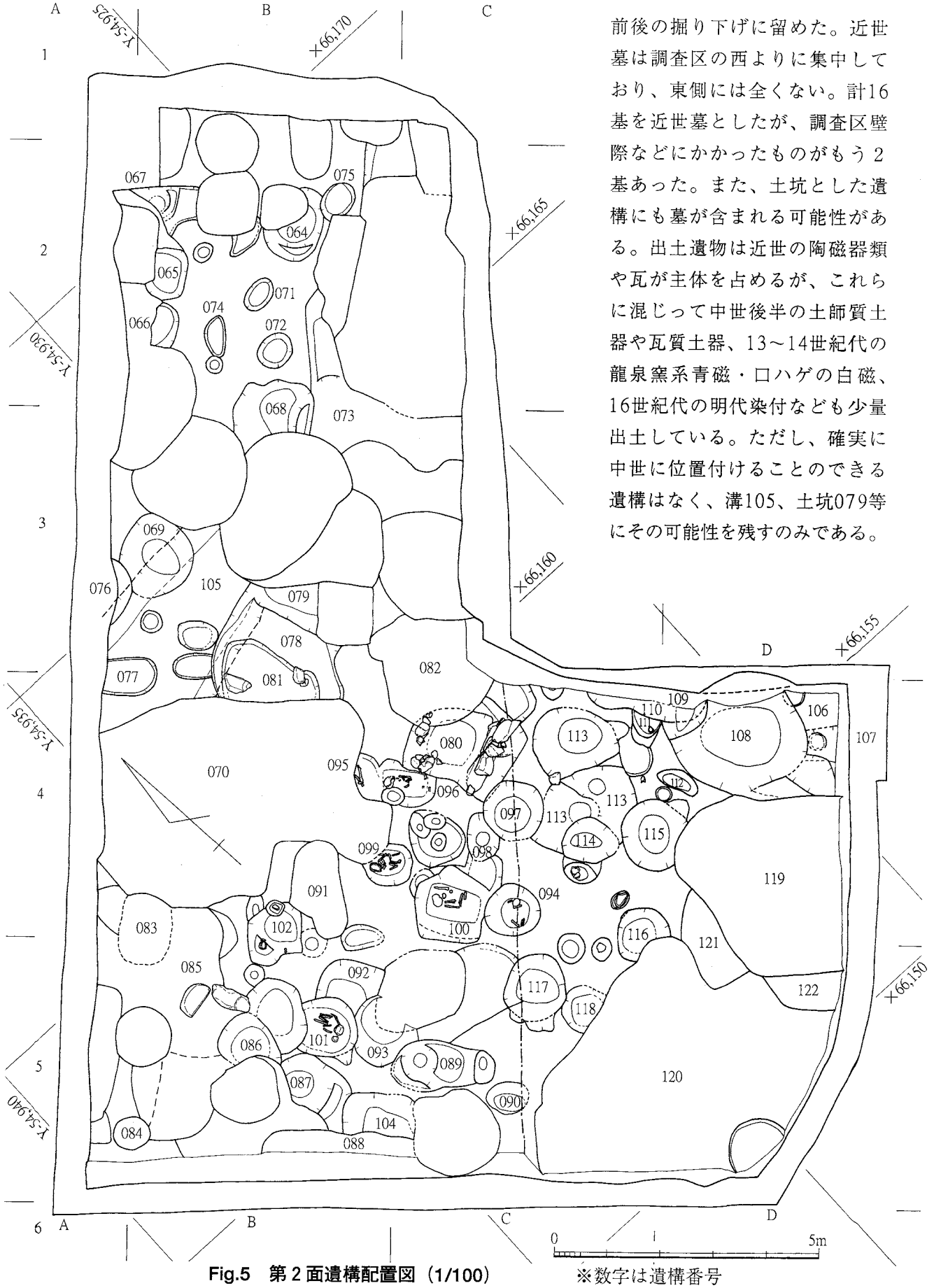


Fig.5　第2面遺構配置図（1/100）　※数字は遺構番号

Ph1.　第 2 面北側調査区全景（南西から）

Ph2.　第 1 面調査区全景（南西から）

Ph3.　第 2 面南側調査区全景（南西から）

4．主な検出遺構と出土遺物

(1) 溝

溝状遺構105 Fig. 6

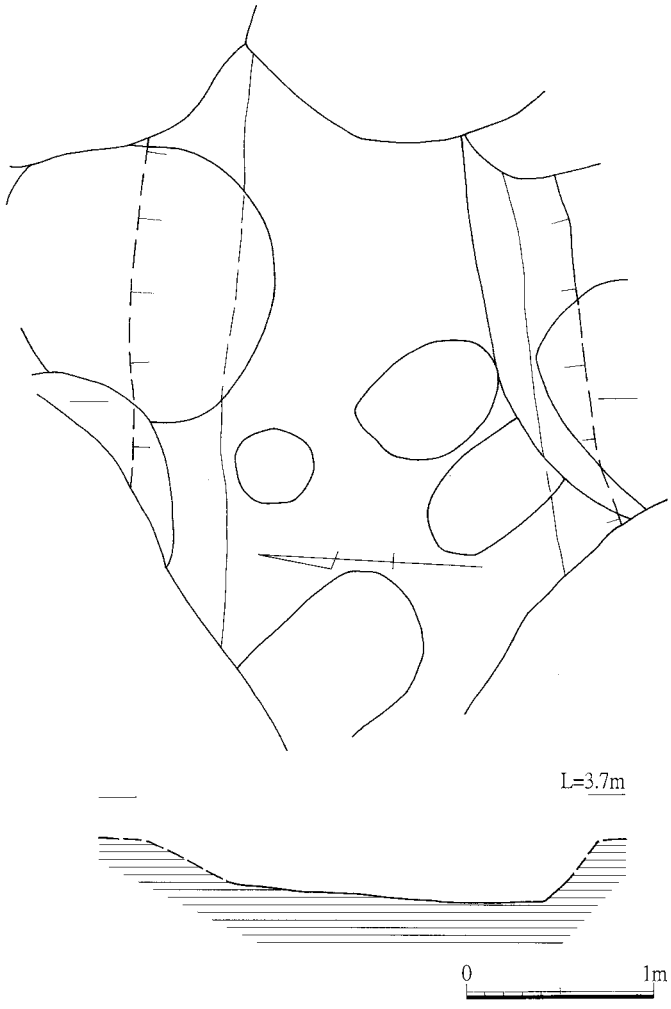


Fig.6 溝状遺構105実測図（1/40）

第２面のＡ～Ｂ－３～４グリッドに検出した。他の遺構との切り合い関係からみて最も古い。遺構覆土は砂が縞状に堆積し硬化している部分もあった。ほぼ東西に主軸をとるが、東西両側を近世の大型土坑に切られ、更に延長線上にも大遺構が連続しており、全容は明らかでない。幅220～250cm、深さ30cmで、横断面形は南に深い逆台形状を呈する。

溝状遺構105出土遺物 Fig. 7

１、２は土師器小皿で、底部は糸切りする。２は板圧痕があり、内底の一部にナデ調整を加える。ともに口縁部を欠く小片で、底径は１が7.9cm、２が8.2cmであろう。この他、土師器坏、土師質土器鍋、瓦などが出土したが、いずれも小片にすぎず図化することができない。肥前系染付など近世遺物が出土していないことから消極的に中世遺構とするが、確証はない。

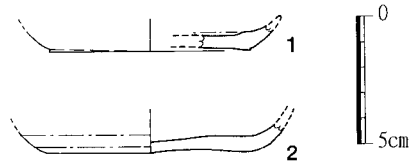


Fig.7 溝状遺構105出土遺物実測図（1/3）

(2) 石組遺構

石組遺構019 Fig. 8、Ph. 4

Ｂ～Ｃ－２グリッドに検出した石組の穴蔵状遺構である。主軸方位は磁北から49°東にふれ、現在の町割りに沿う。北側壁が掘削直後に崩壊するなど危険であり、裏込めの調査や見通し図の作成等を省いた。掘り方はほぼ長方形プランで、長辺450cmを測る。堀り方の断面形は不明だが、底面は東側に深い皿状を呈し、最深部で深さ160cmである。石組は内面を長方形に揃え、長辺200cm、短辺140cmを測る。掘り方底面を15cmほど砂で埋めたレベルから石積みを始めており、高さ130cmにわたり千鳥状に配しながらほぼ垂直に積み上げている。石材は花崗岩が主体を占める。掘削時の所見では、石積みの下端付近まで黒色土で埋めて平坦に均していたようである。出土遺物は石組内をM019、掘り方をM062の遺構番号で取り上げたが、M019は報告を省く。M019出土遺物には銅板刷りの印判染付碗などが含まれ、明治10年以降に埋められたことを示す。一方、M062からは18世紀後半を下限とする遺物が出土しており、石組の構築がこの頃だとすると百年近く使用期間があったことになる。

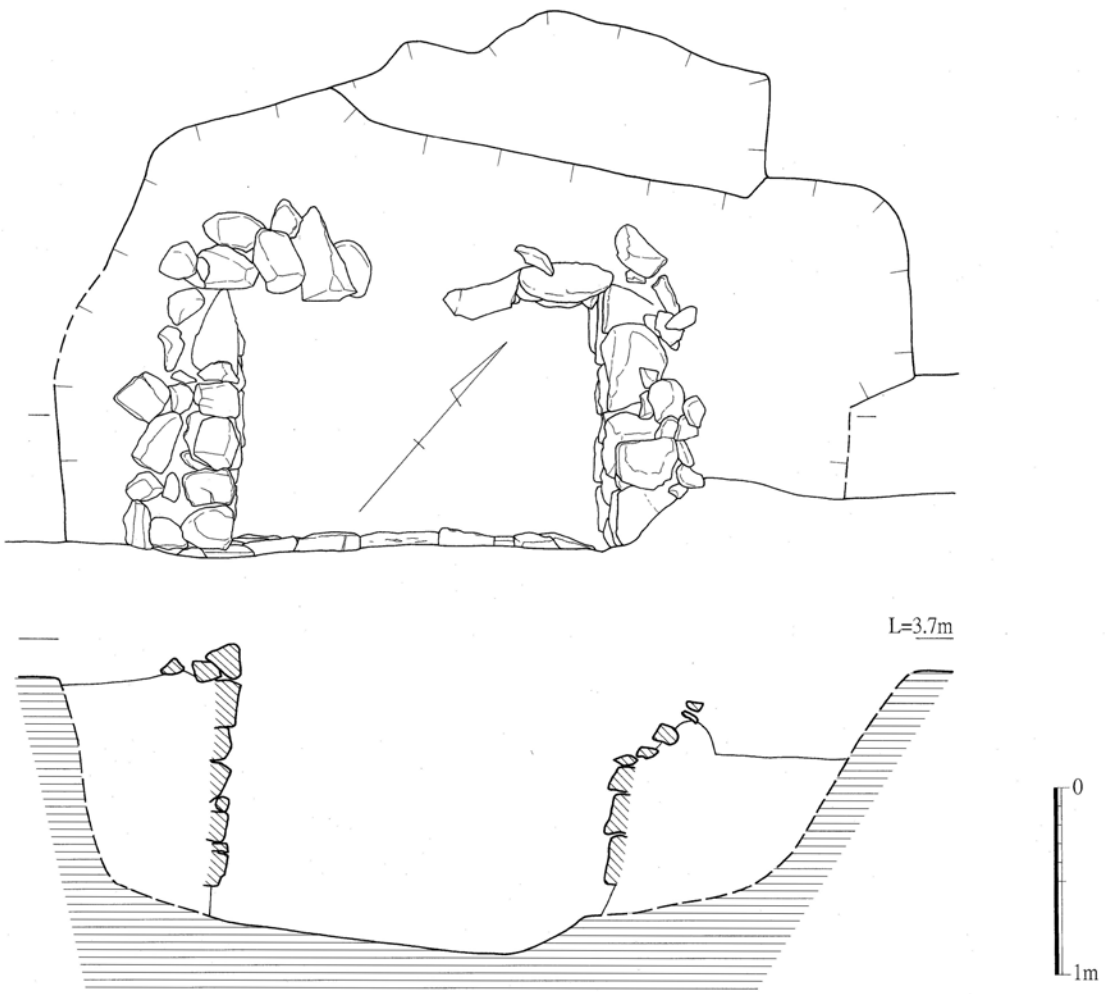


Fig.8　石組遺構019実測図（1/40）

石組遺構019掘り方(062)出土遺物　Fig.9、Ph.5

掘り方出土遺物はM062の遺構番号で取り上げた。以下の遺物の他、陶器、土師質土器七輪、丸・平瓦片、寛永通宝がある。３～５は土師器小皿で底部は糸切り離しである。６～７は肥前系陶器の京焼き風の碗で、７はやや大振りである。口縁外面に鉄絵を入れて淡黄緑色釉を薄くかけ、鉄釉をあしらう。外面口縁以下は回転ヘラ削りし、高台脇から外底は露胎とする。８～10は肥前系染付の碗で、全釉で畳付のみ釉剥ぎする。11～13は肥前系染付の皿で、12は輪花である。いずれも全釉で12・13は畳付を釉剥ぎする。14は肥前系陶器のすり鉢で、すり目は磨滅している。無釉で外底には糸切り痕が残る。15は肥前系色絵の瓶類である。外面は全釉で畳付のみ釉剥ぎし、内面は露胎である。釉の上に赤色、黄白色、金色で施文する。赤は

Ph4.　石組遺構019完掘状況（北東から）

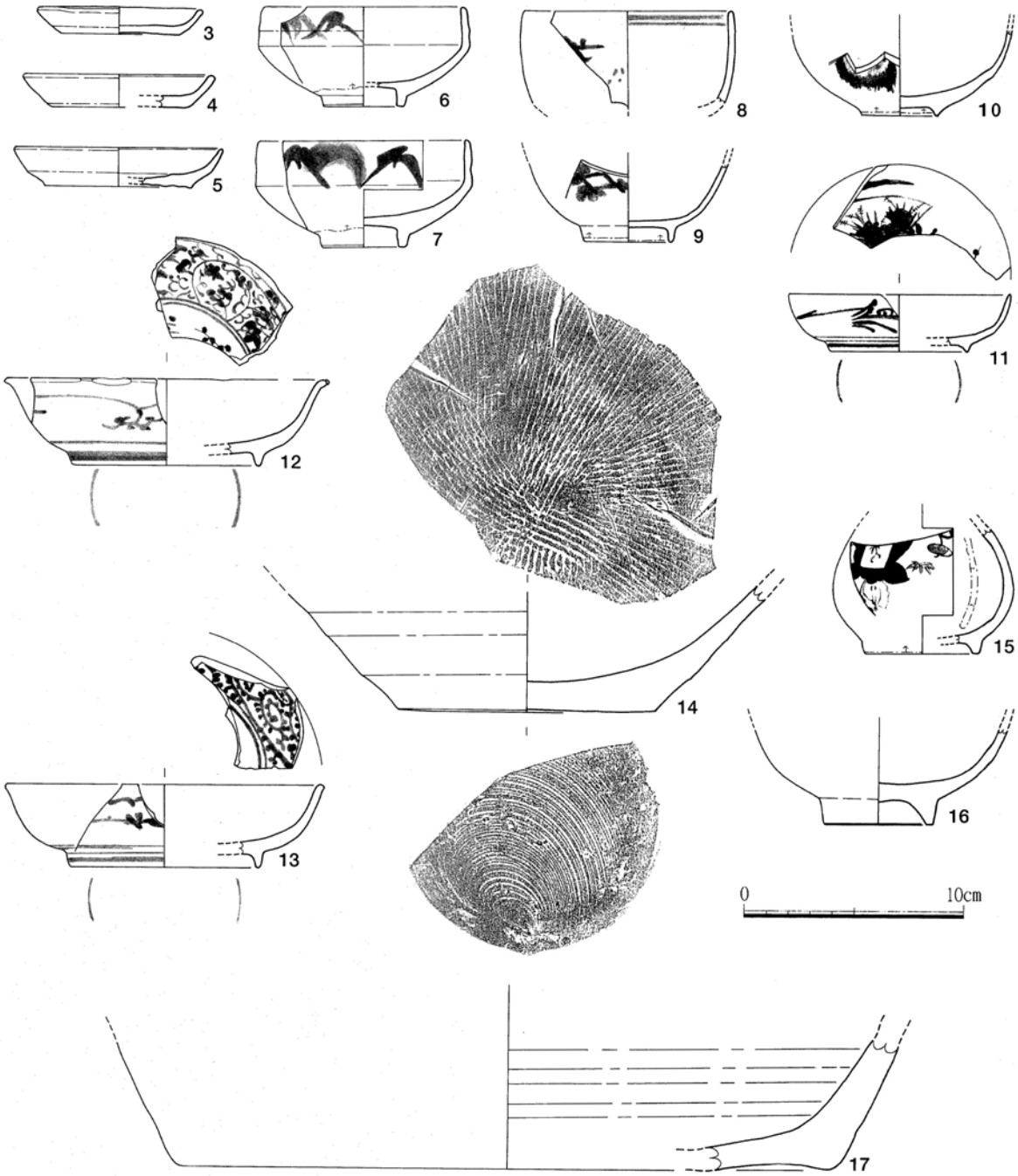
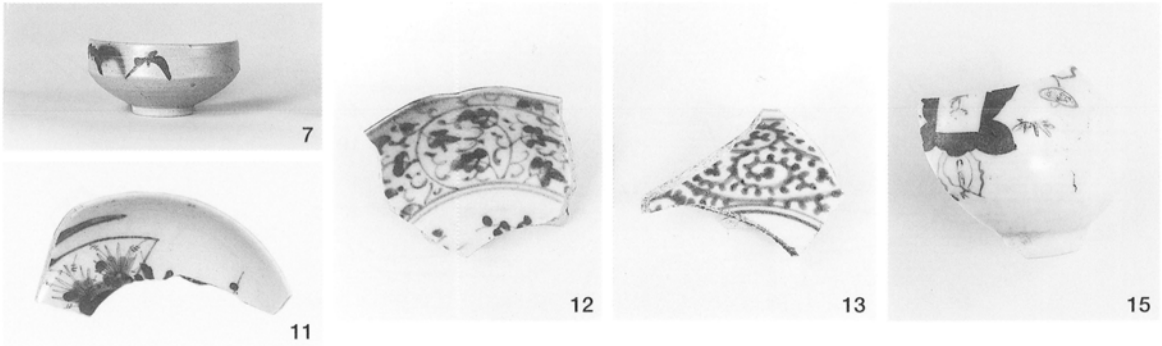


Fig.9　石組遺構019掘り方(062)出土遺物実測図（1/3）



Ph5.　石組遺構019掘り方(062)出土遺物（縮尺不同）

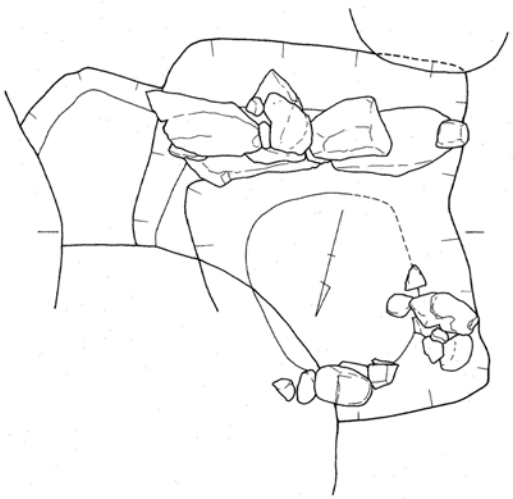
渋柿色に発色し、縁取り線にはやや明るい色を使い分ける。16は肥前系の青磁か。全釉で畳付のみ釉を掻き取るが、一部にハマが付着する。17は陶器の甕または壺の底部である。内面にロクロ目を残し、鉄釉を外面は厚く内面は薄く施す。以上の遺物は肥前系染付の年代観から18世紀後半を下限とした時期が考えられる。

石組遺構080　Fig.10、Ph. 6

第２面のＣ－４グリッドで検出した。他の遺構に切られる上、石が抜かれており残りが悪い。掘り方は長辺200㎝、短辺170㎝の南北に長い長方形プランで、遺構検出面から底面まで70㎝が残る。この掘り方の壁沿いに礫を組み上げた遺構と考えられ、石組は南側のみ残りが良く、面を揃えて２段に積み上げている。北側の礫は根石である。西側の礫は遊離しており、東側は土坑056に破壊され遊離した礫が多数出土した。東側には浅い掘り込みが取りつく。近世墓を切っており、17世紀以降のものであろう。

石組遺構080出土遺物　Fig.11

18は土師器小皿で口径6.8㎝。底部糸切りで板圧痕がある。19～20は土師器坏で底部糸切り。19は口径10㎝、灯明皿として使用している。20は口径11.1㎝、外面にロクロ目が顕著で底部の切り離しは雑である。大内系の影響を受けた土器か。21は白磁碗の口縁部片で、胎土は淡灰白色を呈し陶質、釉は緑味のある白濁釉である。22は白磁壺の肩部片で、外耳が付く。胎土は淡灰白色で黒色粒子を含み、緑味のある白色釉を内外面に施す。他に土師質土器、陶器があるが小片のため図示できない。



Ph.6　石組遺構080（北東から）

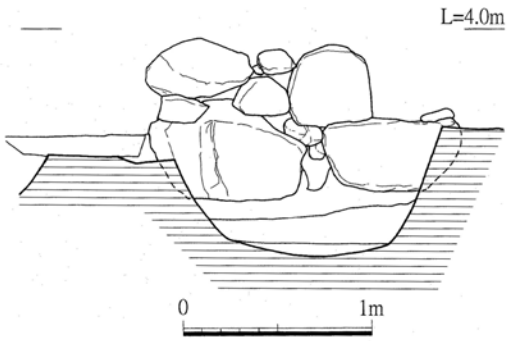


Fig.10　石組遺構080実測図（1/40）

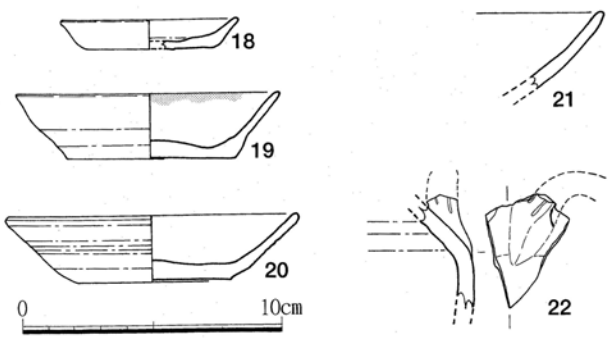


Fig.11　石組遺構080出土遺物実測図（1/3）

(3) 土坑

土坑010　Ph. 7

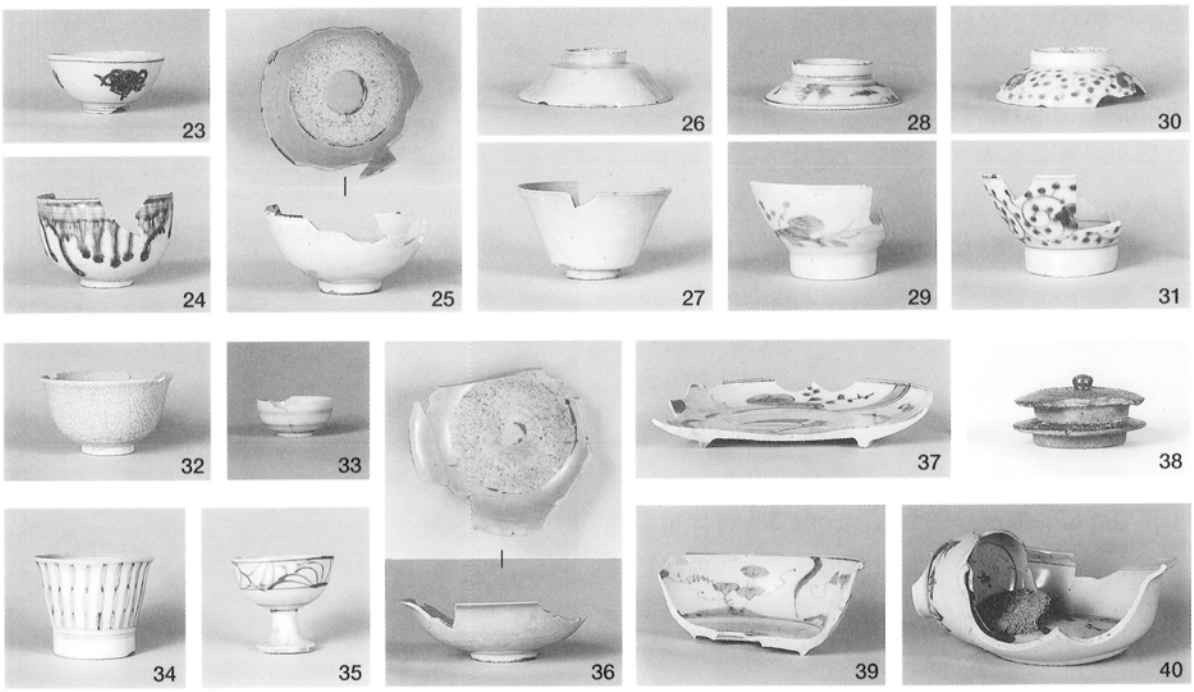
第１面のＡ～Ｂ－２グリッドに位置する。方形プランと思われるが、調査区壁にかかり全容は不明である。検出面から底面まで100㎝を測る。覆土にはびっしりと陶磁器等が含まれていた。

土坑010出土遺物　Ph. 8

陶器、磁器、土師質土器、瓦など、コンテナ25箱がある。陶器は蓋、鉢、壺、花入、灯火具、急須、湯釜、すり鉢などが、磁器は皿、大皿、鉢、広東碗、丸碗、小坏、急須、そば猪口、仏飯器などが、土師質土器は火鉢、七輪、甕などが、瓦には桟瓦、丸・平瓦などがある。他に窯道具であるハマや３個体が融着した磁器もある。量的には肥前系磁器が主体を占め、広東碗がコンテナ５箱、見込みを蛇の目釉剥ぎした磁器皿と丸碗が２箱ずつ、蛇の目凹形高台の皿が１箱分ある。この内代表的なものを写真に示した。23・24は丸碗、25は見込み蛇の目釉剥ぎの碗、26・27は蓋付碗、28～31は蓋付の広東碗、32は端反り碗、33は小坏、34はそば猪口、35は仏飯器、36は見込み蛇の目釉剥ぎの皿、37は大皿、38は２個体が融着した陶器の蓋、39は蛇の目凹形高台の鉢、40は鉢と碗２個体とハマが融着したものである。

端反り碗が少なく、広東碗の文様等にくずれた感じがあり、19世紀初頭頃に位置付けられよう。他に明治期の銅板刷り印判染付碗等が若干含まれており、矢板設置工事などの際に遺物が混入したものとみられる。

Ph.7　土坑010（東から）



Ph.8　土坑010出土遺物（縮尺不同）

土坑020　Fig.12、Ph. 9

第１面Ｂ－３グリッドに検出した。楕円形プランで東西に長く250cmを測る。南北両側を明治期以降の土坑に切られるが、短径は200cm前後となろう。断面形は「U」字形を呈し、検出面から最深部まで235cmを測り、土坑としてはかなり深めである。井戸かと考えて掘削したが、井戸側や湧水痕などは全く見られない。

土坑020出土遺物　Fig.13、Ph.10

遺物は上・下層に分けて取り上げた。上層は土坑010と同時期で、桟瓦や窯道具のハマ等があるが報告は省く。図示した遺物は下層出土である。41は皿山産の高取焼きか。外面口縁以下を回転ヘラ削りし、高台脇を強く削り出す。胎土は淡灰白色で石灰質、鉄絵の後ガラス質の黄緑釉をかけ、高台脇以下は露胎である。42は肥前系陶器の京焼風の腰折れ碗で、鉄絵と鉄釉で口縁部を飾る。43～45は肥前系染付である。43は蓋付碗で外面は青磁釉を厚めにかけ分ける。44は蛇の目凹型高台の皿で、見込みに五弁花文のコンニャク印判を入れる。45は見込みにコンニャク印判、外底には渦「福」銘を入れる。46・47は肥前系陶器のすり鉢で、口縁直下に凸線を回し、全面に施釉する。下層からは図示した土器の他、陶器（褐釉・黒釉）、内外底中央に黒斑のある土師器皿、土師質土器火鉢、桟瓦などが出土した。上層に比べ下層に古い遺物が多い傾向にあるが、18世紀後半～19世紀初頭までのものを含む。

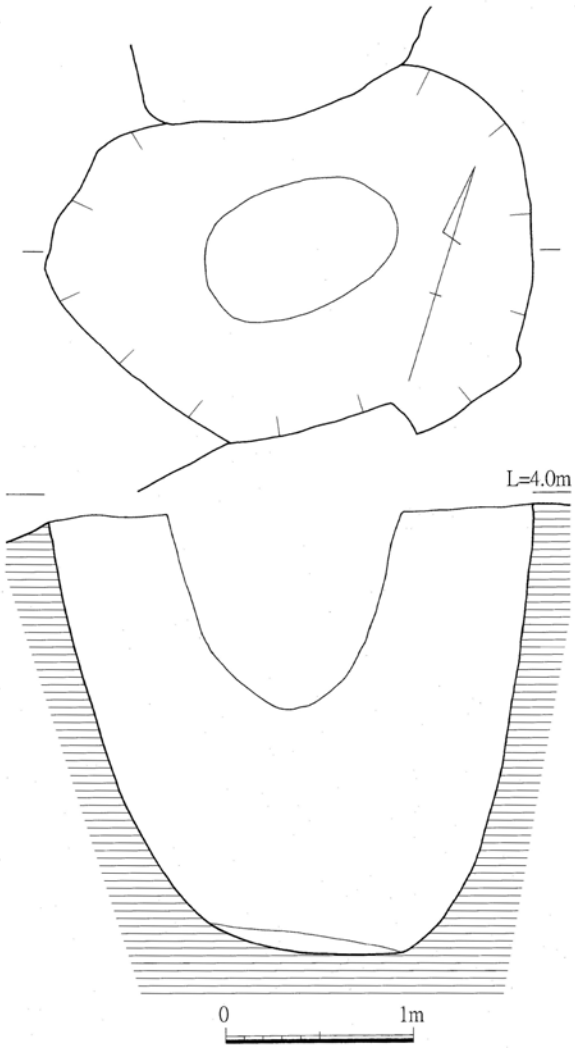


Fig.12　土坑020実測図（1/40）

土坑064　Fig.14、Ph.11

第２面Ｂ－２グリッドに位置する。土坑009に大きく切られる。東西にやや長い楕円形プランで、長径140cm、短径110cm。断面形は逆台形状で、西側に深さ50cmで段を持つ。深さ90cmを残す。

土坑064出土遺物　Fig.15

48～52は土師器小皿で、底部は全て糸切り離しである。口径は順に6.3cm、7.6cm、8.9cm、9.0cm、9.2cmである。53～55は肥前系染付である。53は小坏で外底に裏銘を入れる。全釉で畳付は釉剥ぎである。17世紀後半。54は碗で呉須の発色は53に似ている。口径10.1cm。55は皿で、高台内を深めに削り込む。外底以外に施釉し、畳付は釉剥ぎする。56、57は肥前系白磁の小坏である。56は削り

Ph. 9　土坑020（南東から）

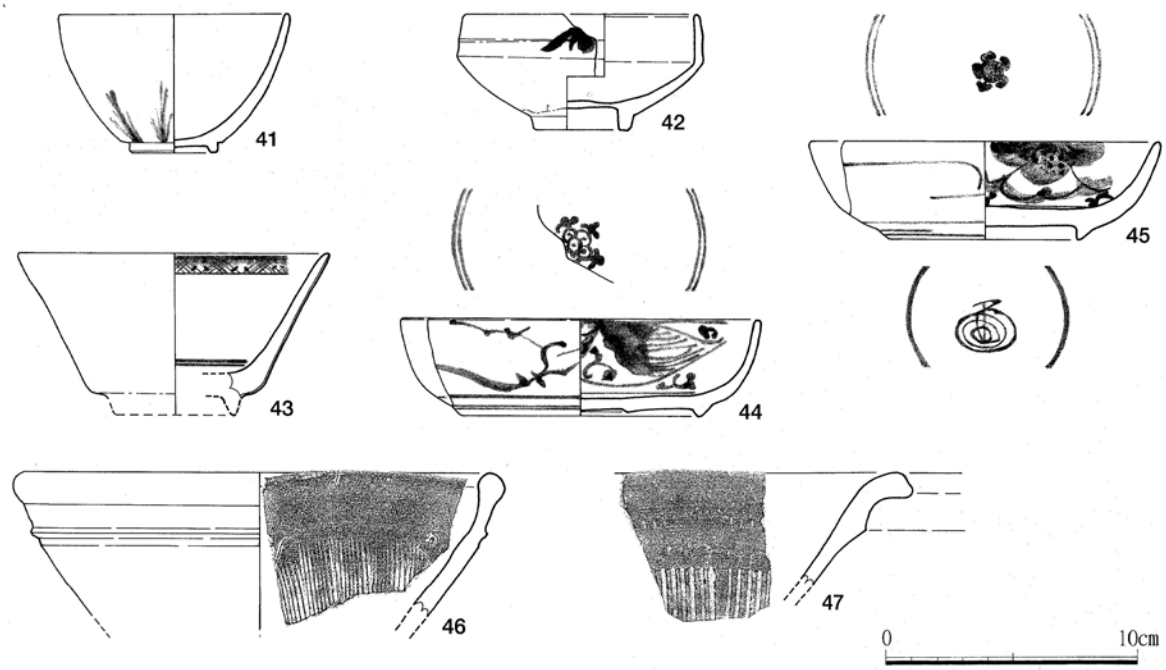
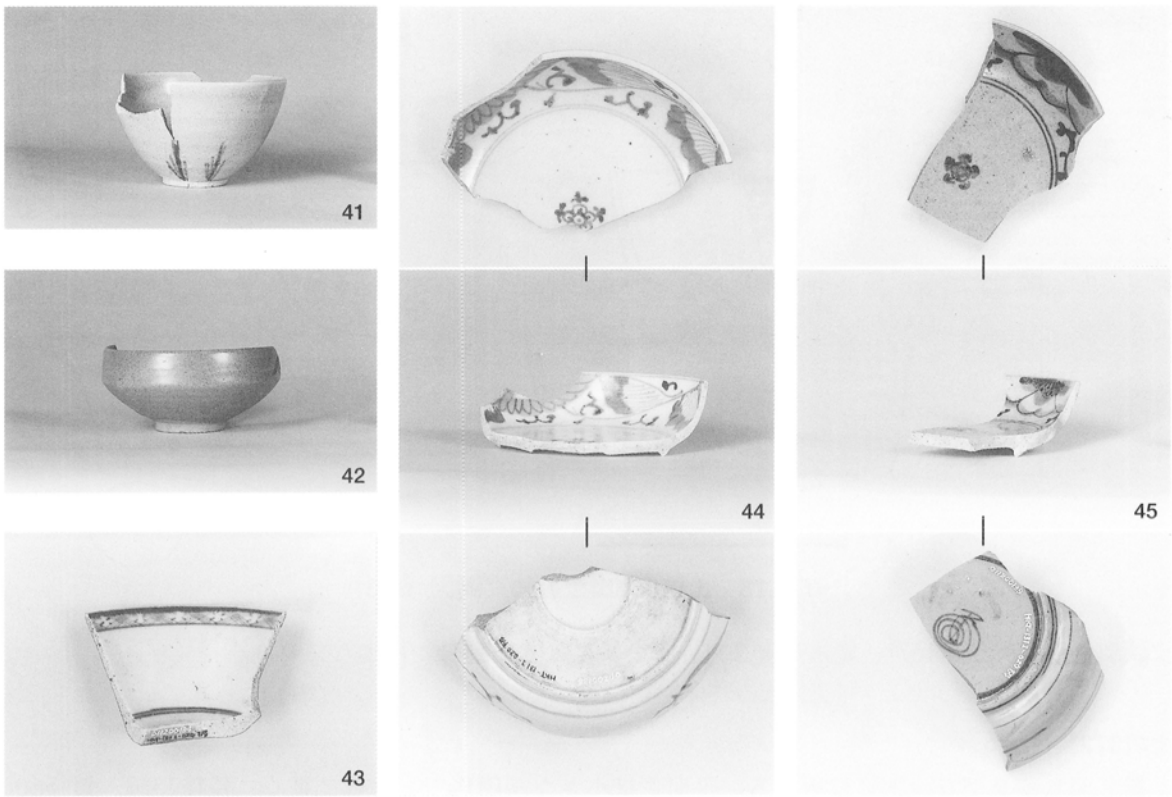


Fig.13　土坑020出土遺物実測図（1/3）



Ph.10　土坑020出土遺物（縮尺不同）

出し高台で畳付には糸切り痕が残る。57は削り出し高台で畳付にハマが付着する。全釉だが外面下半の釉は薄い。口径6.6cm。58は施釉陶器の瓶類の頸部である。外面に鉄釉でらせん状の線を回し、白濁釉をかける。内面下半は露胎である。59は施釉陶器の碗で、唐津焼か。外面口縁以下を回転ヘラ削りし、全釉である。口縁部の小片で輪花の可能性もあり、法量は不正確である。60は瓦質土器火鉢の脚部片である。ヘラで面取りしており、底部は磨滅する。内底には刷毛目調整を加える。他

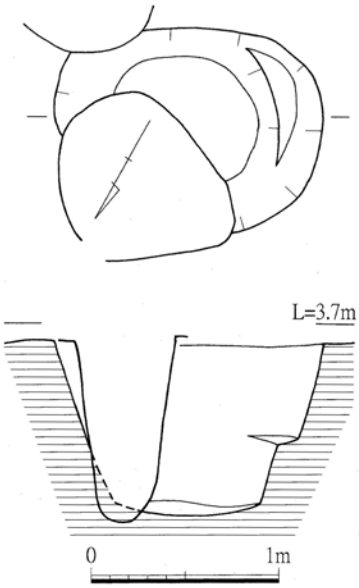
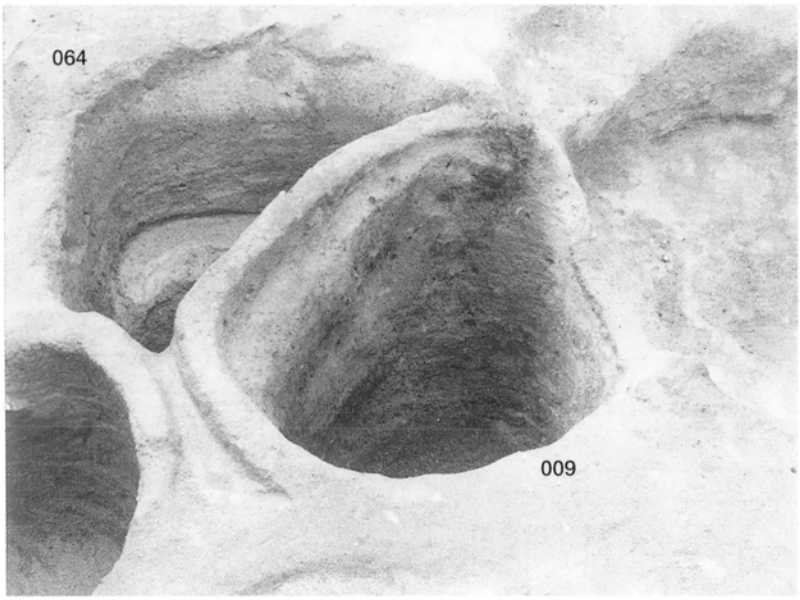


Fig.14　土坑064実測図（1/40）



Ph.11　土坑064（東から）

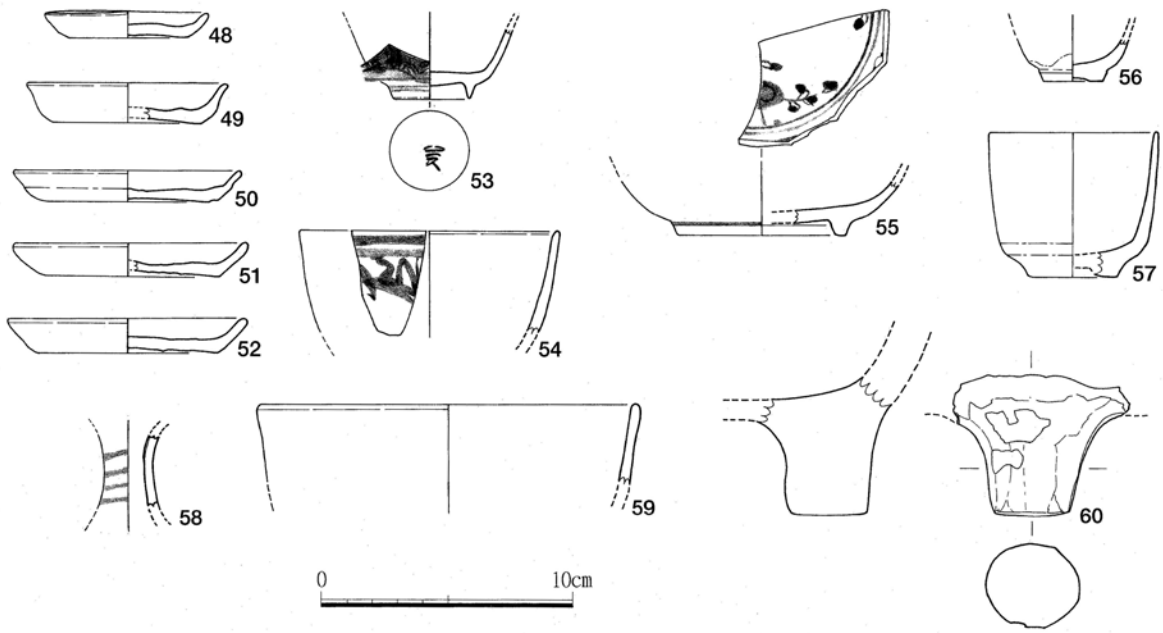


Fig.15　土坑064出土遺物実測図（1/3）

に鉄製包丁（Fig.26-167）、寛永通宝２点、ひとまとまりの鳥骨が出土している。

土坑072　Fig.16

第２面Ｂ－２グリッドに位置する。平面形は小さな楕円形で、東西に長く、長径73㎝、短径60㎝である。断面は逆台形状を呈し、東に深く、深さ15㎝を測る。

土坑072出土遺物　Fig.17

61は土師器小皿で底部糸切りである。口径7.6㎝。62は土師質土器鍋の口縁部小片である。頸部で屈曲し、内湾して開く。外面縦ハケ、内面横ハケ調整を加える。外面には煤が付着する。他に土師質土器鍋小片が３点、寛永通宝１点がある。

土坑073　Fig.16

第２面Ｂ～Ｃ－２～３グリッドに位置する。石組遺構019や近世の土坑群に切られてプランは不明だが、最小でも320cm以上の径を持つ。遺構検出面から最深部まで110cmを測り、北側に段がある。

土坑073出土遺物　Fig.17、Ph.12

63は土師器小皿で底部糸切り。口径7.0cm。64～67は土師器坏で、全て底部は糸切り、64のみ板圧痕がある。口径は順に、10.4cm、10.8cm、11.0cm、12.0cmである。68は肥前系染付の皿か。外底のみ白色釉で、内面から体部外面は青磁釉をかける。畳付は釉剥ぎする。17世紀中頃以降。69は青磁碗の口縁部小片で、胎土は須恵質で灰黒色を呈し、深緑色の釉を厚くかけており、肥前系か。70は肥前系陶器の碗とみられるが小片に過ぎない。胎土は淡灰青色で多孔質、釉は緑味の強い透明釉である。71は土師質土器の蓋であろう。体部外面下半と外底中央に磨滅が見られる。72は土師質土器の底部片である。外面はヘラなで、内面は指整形の後下半をヘラなでする。73は施釉陶器の甕又は鉢の底部片で、内面にロクロ目を残す。光沢のない鉄釉をかけ、体外面下端から外底は露胎である。外底はナデ調整の後、門構えの一字を線刻している。74は土師質土器の鉢で、内面横ハケ、外面はなで調整で煤が付着する。小片だが口径は25cmに復原される。75は瓦質土器鉢で、口唇部を内面に肥厚させる。76は土師質土器のすり鉢だが、焼成は瓦質に近い。77は瓦質土器の火鉢で、内傾内湾する口縁部小片である。口唇部を外方に肥厚させ、直下に印花文を並べる。印花は三重の亀甲文で、中央に「十」を配する。他に鉄製品（Fig.26-169）がある。図示した遺物以外に、龍泉窯系青磁碗Ⅱ類・平底皿Ⅰ類、土師質土器すり鉢・鍋、瓦片がある。17世紀代の遺構であろう。

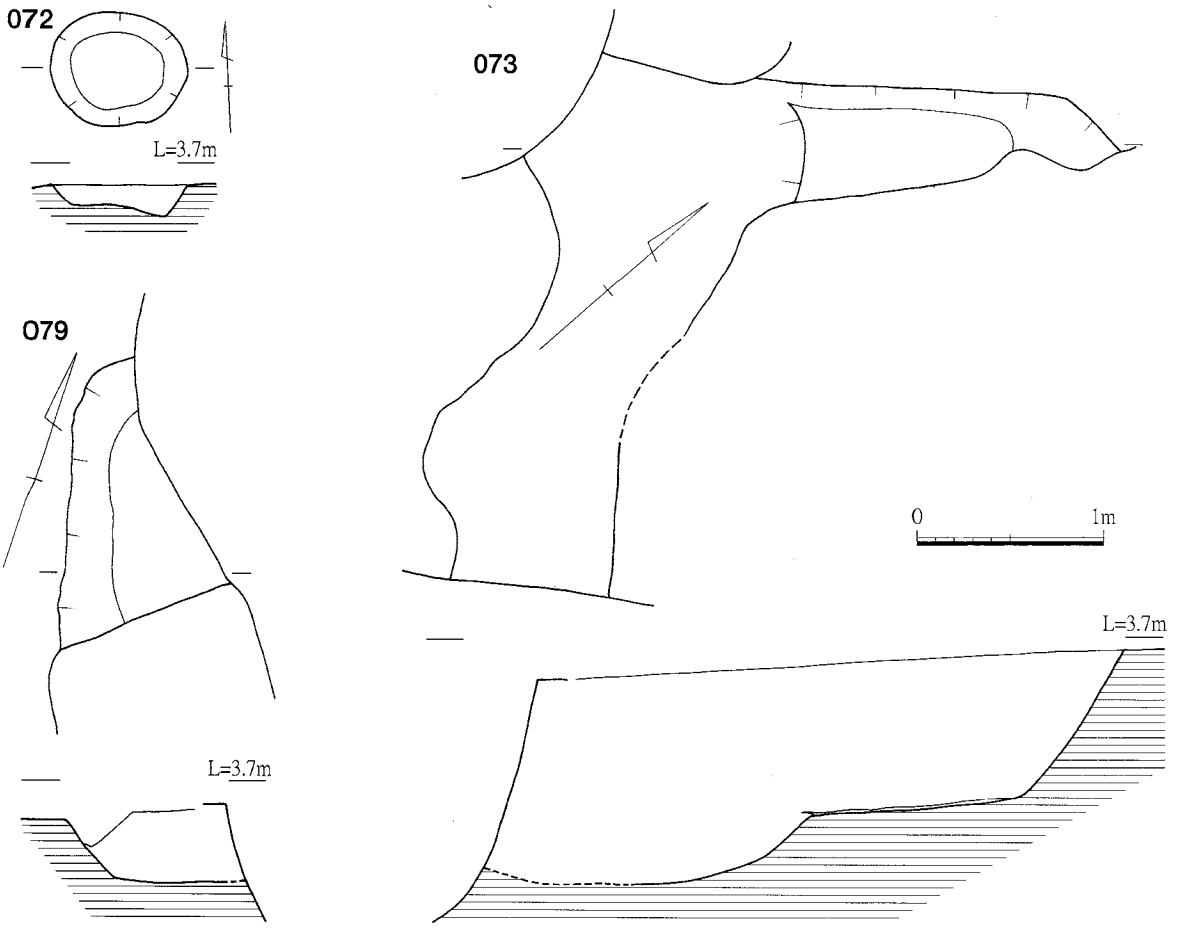


Fig.16　土坑072・073・079実測図（1/40）

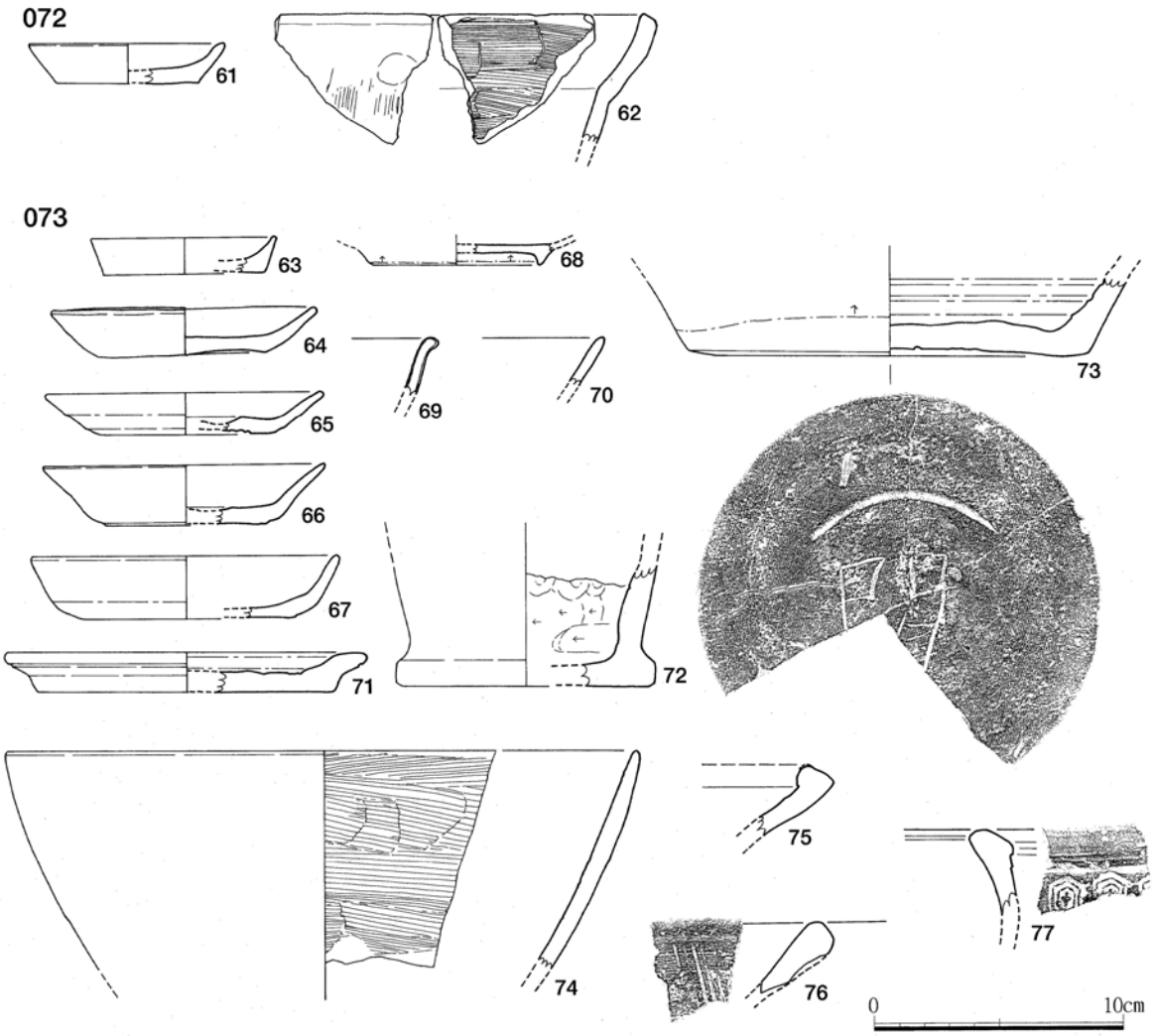


Fig.17　土坑072・073出土遺物実測図（1/3）

Ph.12　土坑073出土土器底部の線刻文字

土坑079　Fig.16

第２面Ｂ－３グリッドに位置する。19世紀頃の土坑022等に切られて一部のみを調査したが、全容は不明である。現況で長さ150cm、深さ35cmである。

土坑079出土遺物　Fig.18

この遺構を切る土坑078と出土遺物が接合するが、土坑076と接合する遺物もあり、土坑076・078・079出土遺物をあわせて報告する。78・79は土師器小皿である。底部は糸切りで、79は板圧痕がある。口径は順に9.0cm、9.4cm。80は土師器坏で、底部糸切り、口径は12.4cm。風化が著しく、流入品と思われる。81は備前焼のすり鉢である。胎土は赤っぽいこげ茶色で、硬質に焼成し口縁外面に炭素が吸着する。小片のため法量不正確。備前焼

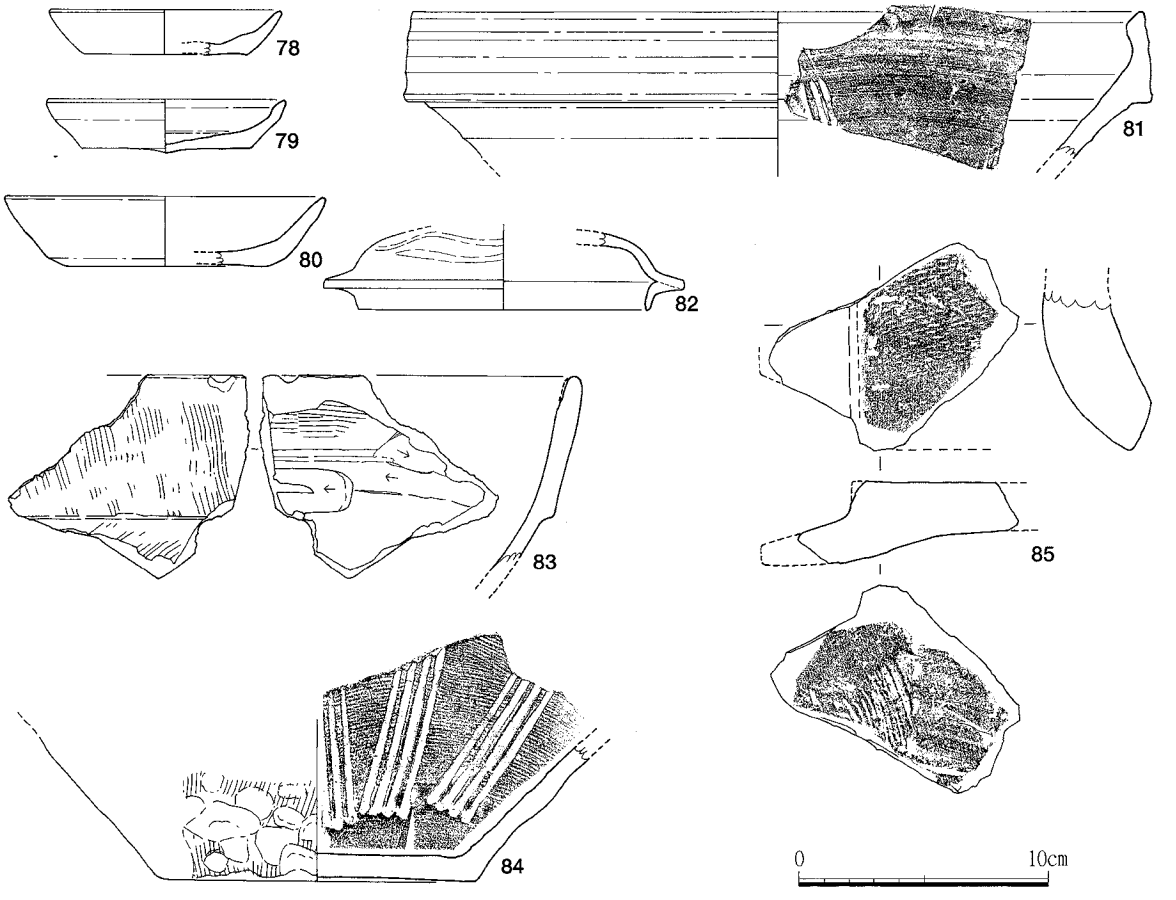


Fig.18　土坑079出土遺物実測図（1/3）

編年のⅤ期に位置付けられよう。82は施釉陶器の蓋である。胎土は淡緑灰色で多孔質、釉下に白色土で波状の文様を入れ、緑味の強い透明釉を外面のみ施す。口縁受け部に重ね焼きの痕跡がある。口径11.3cm。江戸後期以降のものか。83は土師質土器の鉢か。口縁を幅広に肥厚させ、内外面を刷毛目調整する。84は土師質土器すり鉢の底部片である。指整形の後、全体を刷毛目調整し、棒状工具を束ねた4本一組のすり目を時計回りに刻む。焼成は良く、硬質である。85は丸瓦で、玉縁の小片である。凸面に縄目タタキ、凹面に布目が残る。図示した遺物の他に、青磁小片1点がある。82の陶器を混入品と考えれば、中世末に位置付けることができよう。

土坑081　Fig.19

第2面Ｂ－3～4グリッドに位置する。西側を18世紀後半以後の土坑070に切られて全容は不明だが、不整な円形プランとなろう。現況で長さ180cm、深さ10cm。覆土には礫が散漫に含まれていた。

土坑081出土遺物　Fig.20

86は施釉陶器の碗で、内面にロクロ目が残り、外面の口縁以下を回転ヘラ削りする。胎土は灰白色で陶質、釉は緑味のある透明釉で薄くかけ、外面下半は露胎である。肥前もしくは朝鮮産であろう。87は土師質土器鍋で、外面全体に噴き溢れた炭化物と煤が付着する。内面は横位の細かい刷毛目調整で、口径22.6cmに復原できる。図示した以外に土師器小皿と陶器の小片がある。17世紀頃の遺構であろう。

土坑093　Fig.19

第２面Ｂ～Ｃ－５グリッドに位置する。近世墓101や19世紀以降の土坑050等に切られる。平面プランは円形で、径120cm前後となろう。底面はすり鉢状に窪み、深さ50cmである。形状から見て近世墓の可能性がある。

土坑093出土遺物　Fig.20

88は同安窯系青磁碗Ⅱ類で、流入品である。89は施釉陶器瓶類の胴部片である。胎土は淡灰白色で多孔質、釉はこげ茶ないし茶色の鉄釉で光沢がある。内面の釉は極めて薄くかける。近世の国産品と思われる。図示した遺物の他に土師器小皿の小片がある。

土坑108　Fig.19、Ph.13

第２面Ｄ－４グリッドの調査区壁際に位置し、19世紀頃の土坑119等に切られる。南北に長い楕円形プランで、現況で長径260cm、短径200cmほどだが、復原すれば300×240cmほどの規模になろう。断面形は逆台形状で、底面は平坦である。深さ120cm。この土坑の南側には段差があり、この段差は西に落ち込み、深さ100cmを測る。二つの遺構の切り合いかもしれない。

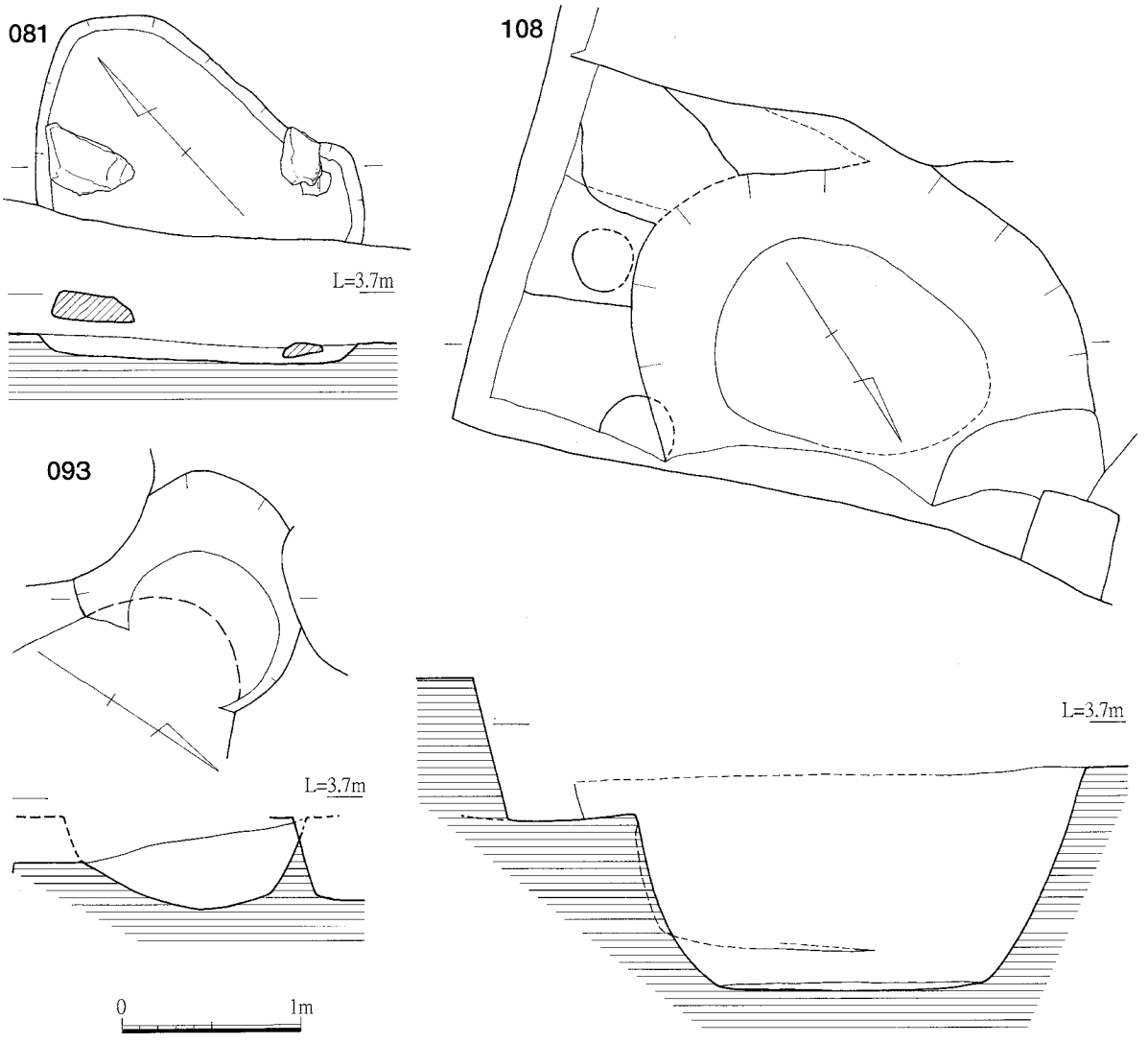


Fig.19　土坑081・093・108実測図（1/40）

Ph.13　土坑108（南から）

土坑108出土遺物　Fig.20、Ph.14

90は土師器小皿で底部は糸切りである。口径8.1cm。91は龍泉窯系青磁碗Ⅴ－4類の小片である。92は土師質土器鍋で、外面全体に煤が付着する。内面は横位の刷毛目調整である。93は肥前系染付の菊花皿で、全釉で畳付は釉剥ぎする。口径13.5cm、底径5.7cm、器高3.9cm。底径が小さく17世紀前半代の古伊万里と考えられ、遺構の時期を示す遺物である。他に陶器甕類、瓦片などが出土した。

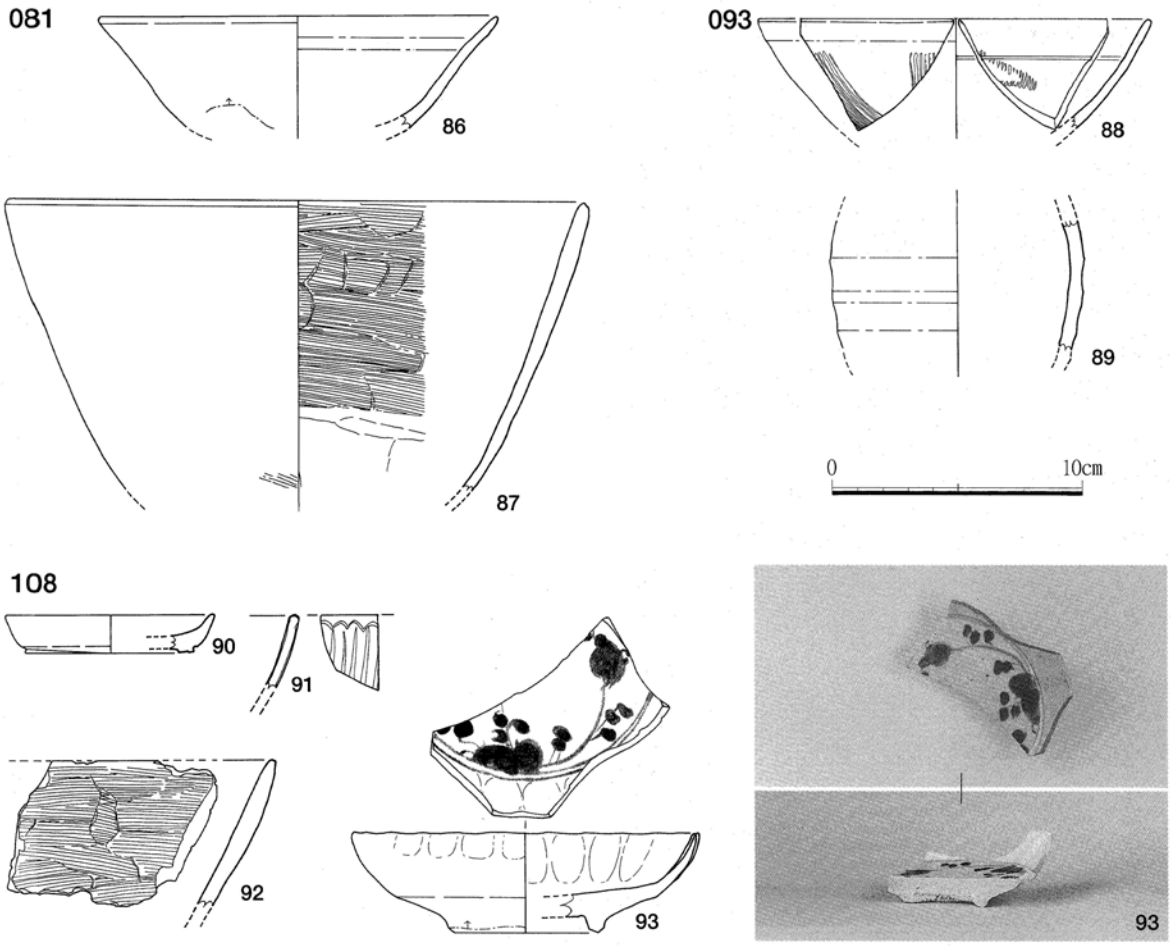


Fig.20　土坑081・093・108出土遺物実測図（1/3）

Ph.14　土坑108出土遺物

(4) 近世墓

近世墓は12基を報告するが、他にも近世墓113や、土坑093等近世墓の可能性をもつものがある。

近世墓094 Fig.21、Ph.15

第２面Ｃ－４グリッドに位置する。掘り方は南北に長い楕円形プランで長径105cm、短径100cm、断面は逆台形で深さは40cm。座葬で桶であろう。頭を北東に置き、西面する。土師器小片が出土した。

近世墓095 Fig.21

第２面Ｂ－４グリッドに位置し、近世墓096と切り合うが先後関係は不明。北～西側を大型土坑070に切られる。現況で径80cm、深さ15cm。人骨の一部が残る。陶磁器２点が出土したが図化できない。

近世墓096 Fig.21、Ph.15

第２面Ｂ～Ｃ－４グリッドに位置する。掘り方は南北に長い長方形プランで、長径100cm以上、短径75cm。深さ20cm。頭位を北西に置き、仰臥し顔を東に向けた屈肢葬で、木棺であろう。土師器、陶器、瓦などが出土したが、いずれも小片で図示できるものはない。

近世墓097 Fig.21

第２面Ｃ－４グリッドに位置する。掘り方は円形プランで径115cm。桶状に深く掘り下げ、深さ85cm。人骨は残っていないが、桶か。

近世墓097出土遺物 Fig.22、Ph.16

94～96は土師器小皿で底部は全て糸切り。口径は順に6.2cm、6.4cm、7.3cm。96はロクロ目をよく残し、大内系の土器か。97・98は土師器坏で底部糸切り。97はロクロ目が顕著で、口唇端部を面取りしその下端に沈線一条を回す。大内系の土器とみられる。口径11.6cm。98は口径12.8cmと大きく、流入遺物であろう。底部に板圧痕がある。99は古代の土師器高台付坏の底部小片である。著しくローリングを受けている。100は肥前系染付の碗か。呉須は薄紫色を呈し発色が悪い。101は陶器の甕類で外面に自然釉がかかる。中国産ではなく、産地は不明。102は肥前系白磁の小坏である。端反り口縁で、高台を削り出して露胎とする。103は土師質土器鉢である。上記以外の遺物に瓦片がある。102の小坏より17世紀前半～中頃の遺構と考えられる。

近世墓099 Fig.21、Ph.15

第２面Ｂ～Ｃ－４グリッドに位置する。掘り方は南北に長い楕円形プランとみられ、長径95cm、短径80cm。深さ20cmで浅い。座葬で、頭位は北西。桶か。陶器片口鉢と寛永通寶２枚が副葬されていた。

近世墓099出土遺物 Fig.22、Ph.16

104は施釉陶器の鉢である。口縁端部に平坦面をつくり、沈線を２条まわす。口唇の一カ所に３cm幅の切り込みを入れて片口とする。外面下半にヘラ削りを加えて高台を削り出し、外底中央に突起を残す。高台の削り出しは粗く、高台幅と高さが不均一で器が傾く。胎土はココア色で、濃緑色の鉄釉を口縁から垂らし、外面下半は露胎とする。釉が泡立ち、斑点状に無釉部分が散在する。高台回りを指で掴んだとみえ、４カ所に斑点状に釉が付着する。口径11.6cm、器高7.1cm。105は副葬品の寛永通宝で、２枚が文字面を合わせた状態で銹着していた。104が唐津焼とすれば17世紀前半代か。

近世墓100　Fig.21、Ph.15

第２面Ｃ－４グリッドに位置する。掘り方は長方形プランで長径140cm、短径115cm、深さ40cm。平面形から木棺と考えたが、座葬であり桶かもしれない。頭位は北西。土師器小皿２点を副葬する。

近世墓100出土遺物　Fig.22

106・108は副葬遺物で完品、他は覆土から出土した。106～108は土師器小皿で、底部は糸切り。口径は順に7.0cm、7.0cm、8.6cm。109は土師器坏で口径11.5cm。110は明代白磁皿で、全釉で畳付は釉剥ぎである。111は土師質土器鍋で、外面全体に煤が付着する。他に染付と黒釉碗の小片、鉄製品（Fig.26-171～175）が出土した。17世紀代の遺構であろう。

近世墓101　Fig.21、Ph.15

第２面Ｂ－５グリッドに位置する。掘り方は楕円形プランで長径110cm以上、短径110cm、深さは50cmを測る。頭位を南東に置いた座葬で、桶であろう。土師器小皿と寛永通宝１点を副葬していた。

近世墓101出土遺物　Fig.22

112は土師器小皿で、口縁の一部を欠くがほぼ完品である。口径8.9cm。113は副葬の寛永通宝。他に、覆土から土師質土器小片が出土した。

近世墓102　Fig.21、Ph.15

第２面Ｂ～Ｃ－４グリッドに位置する。方形の土坑に大きく切られて一部を残すのみであるが、切り合いに気づかず同時に掘り下げてしまった。掘り方は少なくとも径80cm以上。深さ45cm。

近世墓102出土遺物　Fig.22

114・115は土師器小皿で、底部は糸切り。口径は順に9.2cm、9.9cm。114は完品で、副葬遺物の可能性がある。他に、底部内外面中央に黒斑のある土師器坏、陶器瓶、七輪、瓦など19世紀代の遺物があるが、墓を切る方形土坑に含まれていた遺物が混入したものである。

近世墓114　Fig.21

第２面Ｃ－４グリッドに位置する。掘り方は楕円形プランで、長径105cm、短径85cm、深さ65cm。

近世墓114出土遺物　Fig.23、Ph.16

116は土師器小皿で、底部糸切り。口径7.0cm。117は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-５類。118は青磁碗、119は青磁輪花皿の小片である。120は白磁碗で、胎土は乳白色で粗、釉は緑味のある白濁釉で口縁外面に釉溜りがあり、口唇部の釉を一部ふき取る。121は白磁または染付の瓶類で、灰味のある白色の胎土に、青味のある透明釉を全体にかける。122～124は明代染付で、中国南方産か。122は碗で貼り付け高台。見込みの圏線は呉須が極めて淡い。胎土は淡灰白色で多孔質、釉は淡い青白色で外面が厚く、外底には白色釉をかけ分ける。畳付は露胎。123は碁笥底の皿で、呉須は緑色を呈し発色が悪い。胎土は淡乳白～灰白色で磁質、釉は緑味のある白色釉で、見込みと外底は露胎。施釉が雑で呉須の一部がむきだしである。124は皿で、灰白色の胎土に、緑味のある透明釉をかけ、見込みは釉を掻き取る。125は備前焼壺で、自然釉を被る。126は肥前系陶器の壺類で、外底は糸切り離し、外面下半から外底は露胎。127は肥前系陶器の皿か。内面に白化粧土を塗布し、文様部分のみ掻き取る。胎土は暗茶色で灰釉か。128は肥前系陶器の瓶類か。胎土は灰色で、外面に鉄絵の後、透明釉をかけ、内面は露胎。129・130は土師質土器鉢で、口唇部に凹線を入れる。131は瓦質土器鉢、132は瓦質土器すり鉢である。133は丸瓦の玉縁片である。以上の遺物は下限を17世紀前半代におけよう。

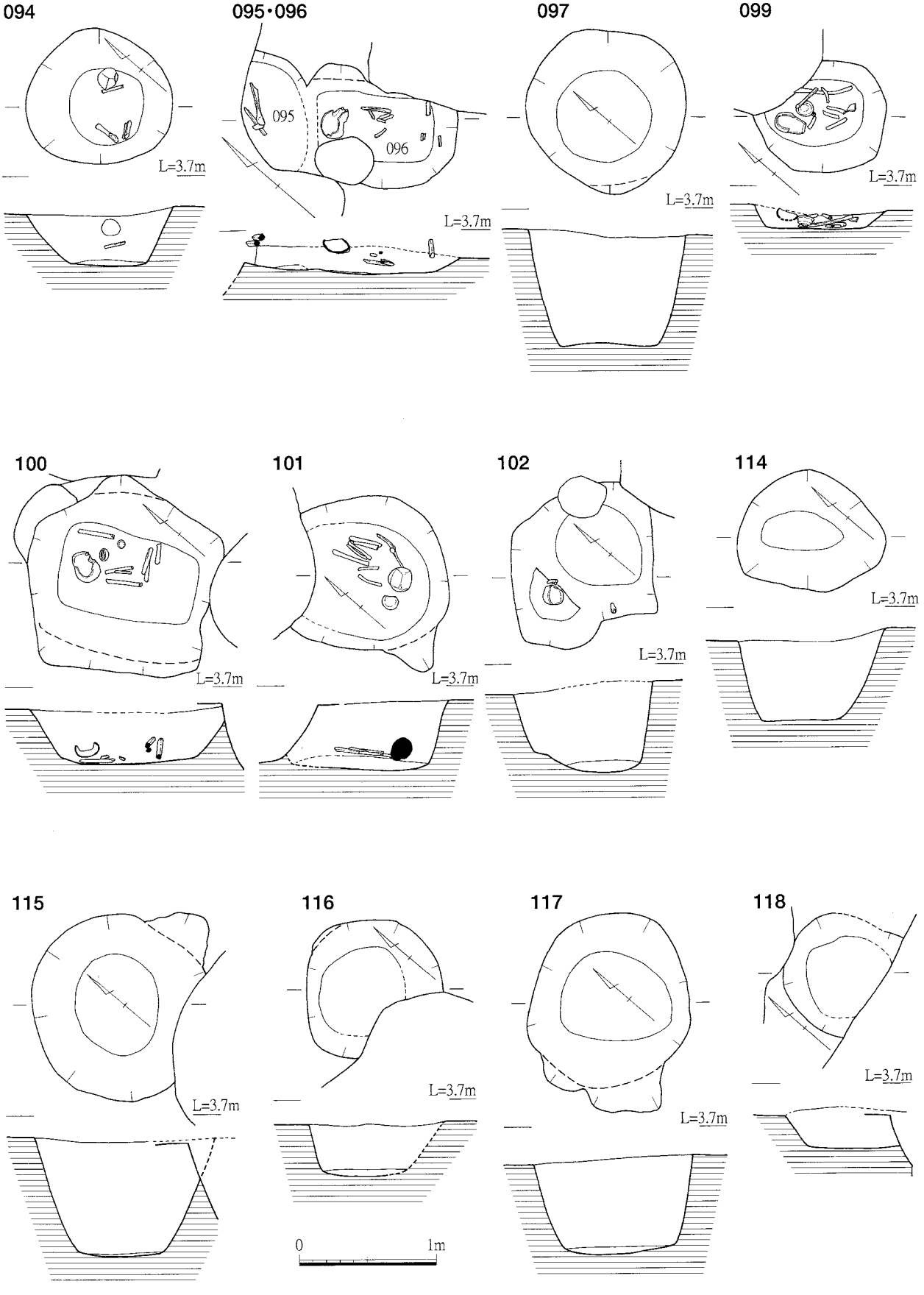
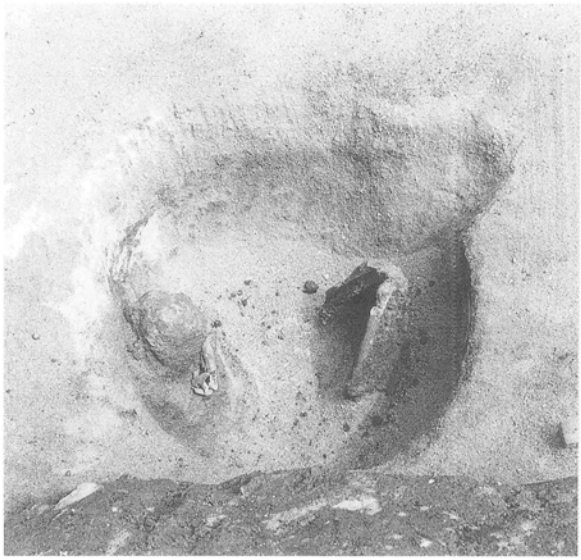


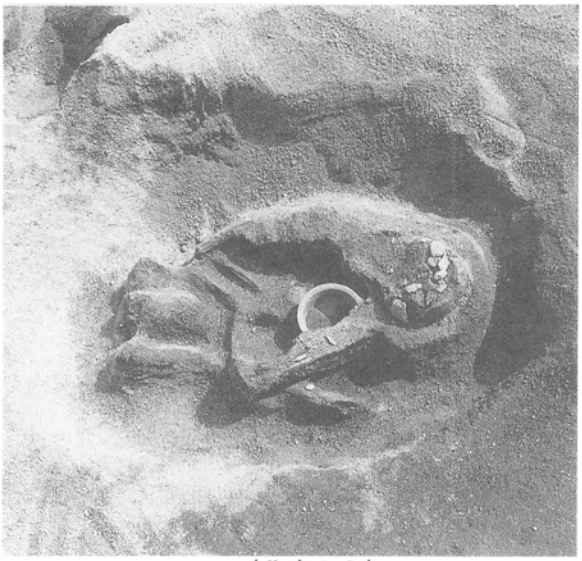
Fig.21　近世墓実測図（1/40）

※平面図の方位は全て同じ



094（北西から）

096（南東から）



099（北東から）

100（南東から）

101（南西から）

102（北東から）

Ph.15　近世墓の人骨出土状況

近世墓115　Fig.21

第２面Ｃ～Ｄ－４グリッドに位置する。掘り方は円形プランで径130cm、深さ85cm。桶であろう。

近世墓115出土遺物　Fig.23、Ph.16

134は土師器小皿で底部糸切り、口径5.6cm。135は白磁小片、136は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-６類である。137・138は肥前系染付もしくは中国製品か。137は輪花皿で溝縁、138は碗である。139は肥前系陶器碗で、高台は削り出しで、高台内に突起を残す。体外面下半は露胎で、見込みと畳付に重ね焼きの痕跡を残す。140は土師質土器鍋で外面に煤が付着する。17世紀初頭から前半代におけよう。

近世墓116　Fig.21

第２面Ｃ～Ｄ－４～５グリッドに位置する。掘り方は隅丸方形で径100cm、深さ35cm。桶か。

近世墓117　Fig.21

第２面Ｃ－５グリッドに位置する。掘り方は楕円形で長径130cm、短径115cm、深さ70cm。桶か。

近世墓117出土遺物　Fig.24

141・142は土師器坏で、底部糸切り。いずれも小片のため法量は不正確。143は土師質土器鉢で片口が付く。144は土師質土器鍋で、外面に煤が付着する。145は瓦質土器鍋で、外面に煤が付着する。

近世墓118　Fig.21

第２面Ｂ～Ｃ－４グリッドに位置する。掘り方は円形プランで径85cm、深さ30cm。桶か。

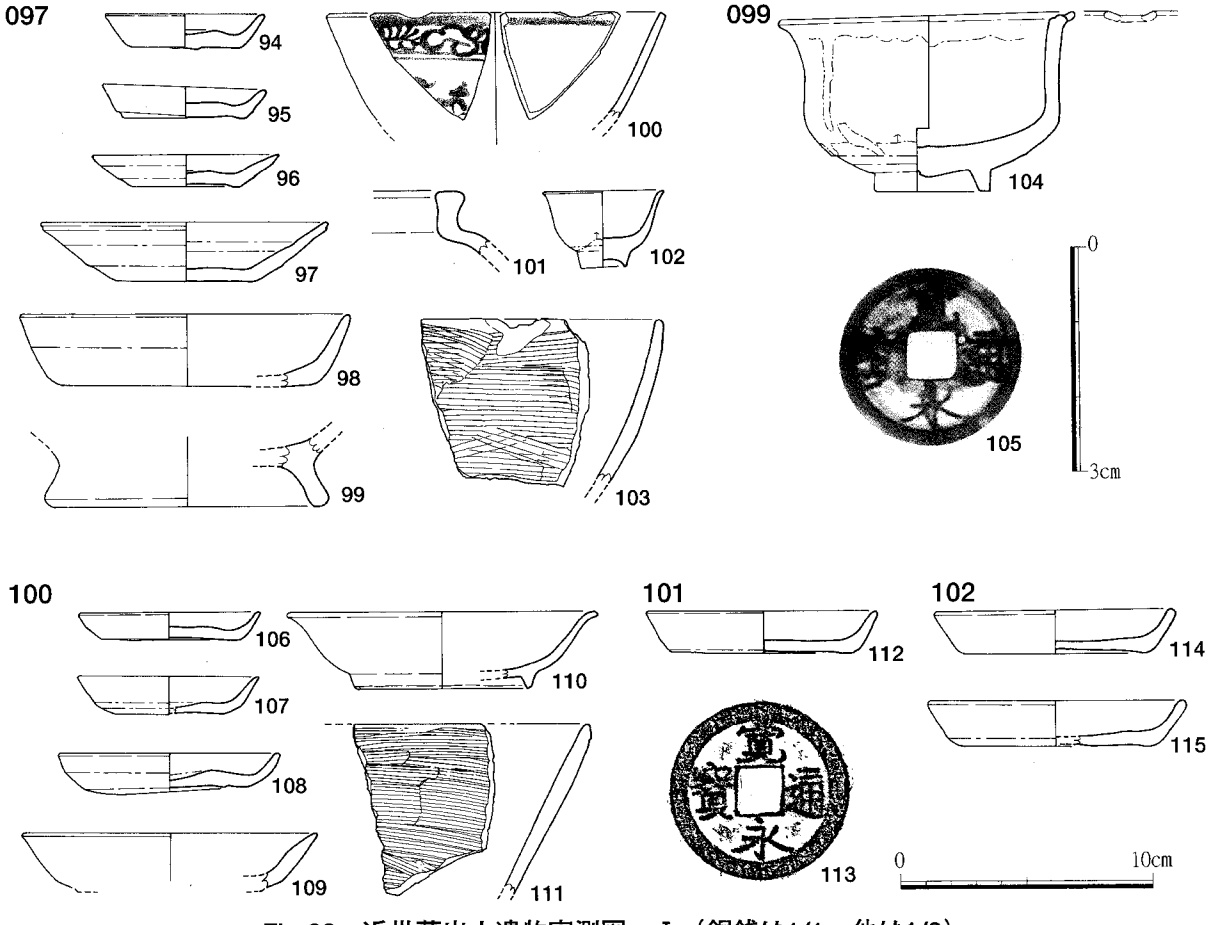


Fig.22　近世墓出土遺物実測図・Ⅰ（銅銭は1/1、他は1/3）

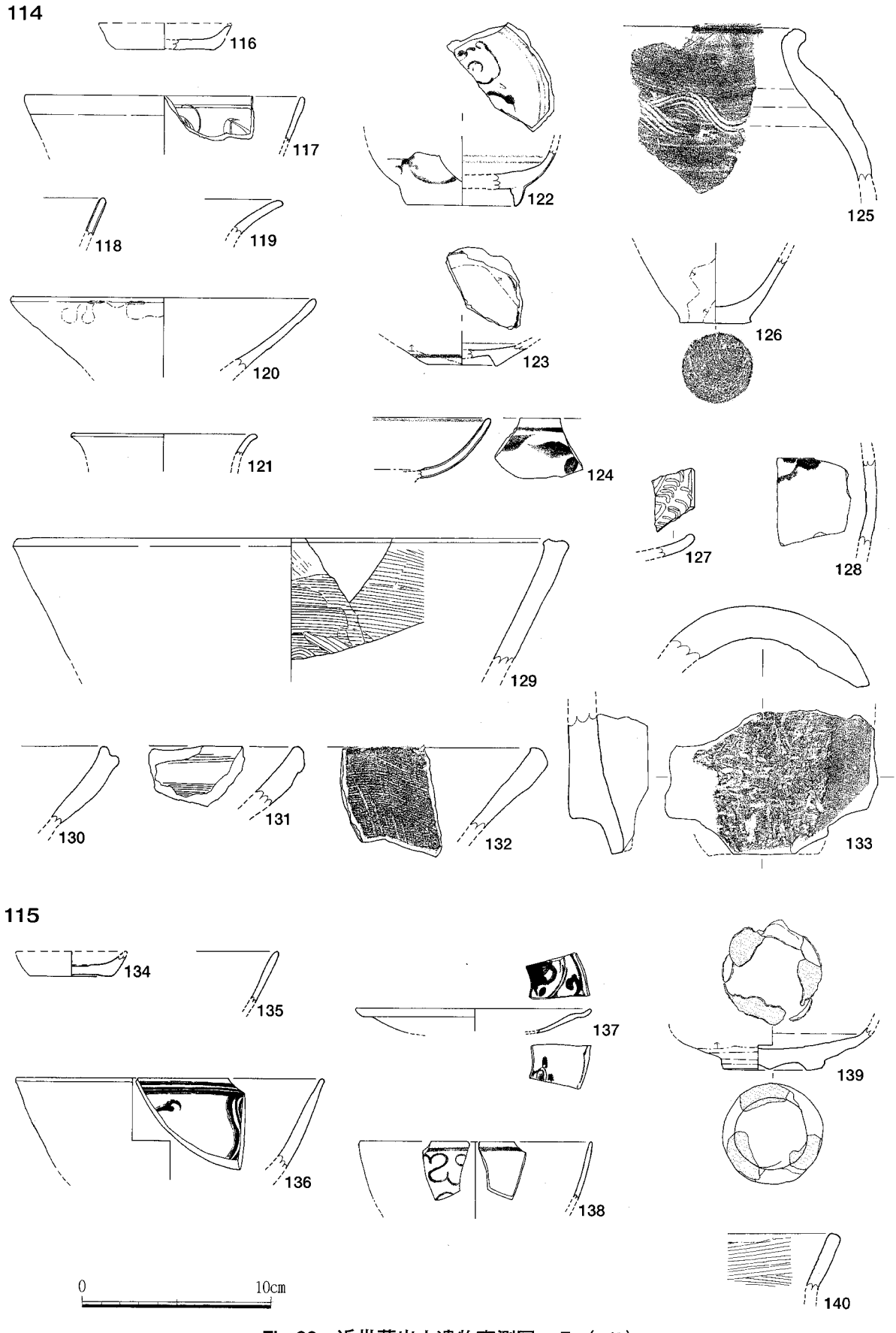


Fig.23　近世墓出土遺物実測図・Ⅱ（1/3）

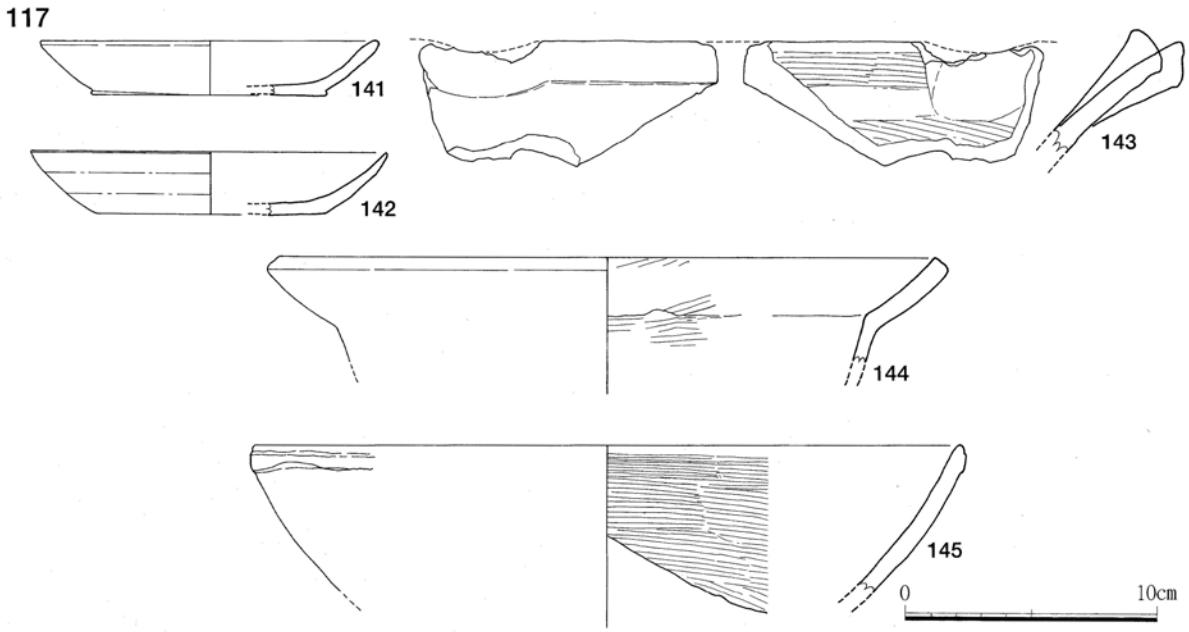
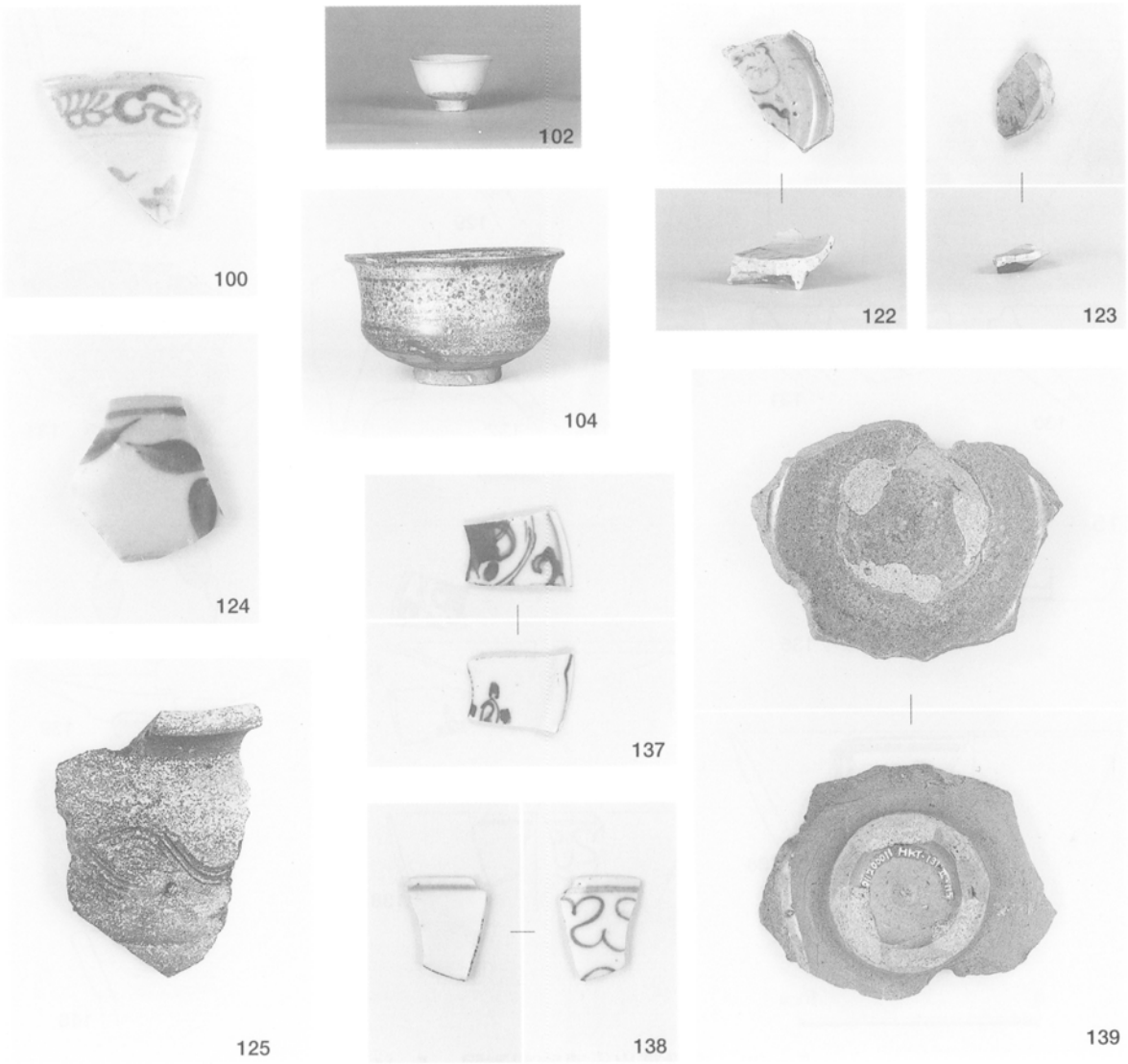


Fig.24　近世墓出土遺物実測図・Ⅲ（1/3）



Ph.16　近世墓出土遺物（縮尺不同）

(5) その他の遺物　Fig.25～27、Ph.17

報告からもれた遺構や包含層の出土遺物、石製品、銅製品、鉄製品、土製品、銅銭をまとめた。

146は口禿げの白磁である。147は明代の染付碗で、胎土・釉ともに黄色味が強く、粗悪品である。外面に芭蕉葉文、見込みに蓮華文を施す。148は土師器小皿で、糸切り離しの外底に墨書の一部が残る。149は肥前系陶器の京焼き風の碗で外底に墨書があり、花押か。150は軒丸瓦で「阿」銘の瓦当文様がある。径は12cmと小さく、燻して黒色とする。

151～153は石製硯である。いずれも使用により陸部が溝状に深く窪み、墨痕を残す。153の裏面には「下」「大」「開」などの雑な線刻がある。いずれも18世紀代以降のものである。154はすり臼の下臼か。155は鹿角製のヘラで、上端が磨滅して丸みを帯びる。156はガラス玉である。

157は坩堝で内面から口縁外面まで銅滓が付着する。胎土にスサを含み外面は二次加熱により脆くなっている。158～166は近世以降の銅製品である。158は鍵でL字形の基部に細い先端部が付く。使用によって先端部が捻じれる。159は鑢、160は金火箸である。161は簪で、梅花をあしらった飾りが可動する。162～164は煙管雁首、165～166は同吸い口である。

167～175は鉄製品である。167は包丁で錆化のため残りが悪い。168は鉈であろう。169はL字形を呈するピッケル状の鉄製品である。170は大型のさじで、厚さは2ミリ程である。171は薄い鉄板を凸状に折り曲げ、木材に鋲で固定したものである。鉄板の外側屈曲部にはリング状の細板2枚を貼り付ける。更に裏側には細い鉄板3枚を貼り付け、その一部を表へ貫通させて環頭にしている。環頭部は細板3枚の反発力によりバネのように伸縮したものと考えられ、錠のような用途が想定できる。172～175は釘で、172、173は環頭、175はフック状の頭部を付ける。171～175は近世墓100から出土しており、組み合わせて使用したものと考えられる。

176～193は中実の素焼き人形で、いわゆる「いけどうろう」である。うち187以外は兵馬を表現しており、日露戦争を題材とする。177～182は黒色、176・183～185・188は黄・青・白色等に塗ったもので黒色は日本兵、その他の色はロシア・中国兵を示すという。186は小型品、189は伏せ兵もしくは負傷兵、190～193は馬である。187は幼児を表現したもの。194～198も中実の素焼き人形である。194は猿、195～198は仏を現す。199～206は中空の素焼き人形で、初期の博多人形とみられる。199～202は武人、203・204は婦人を表現したもの。207は素焼きの装飾品である。208は施釉陶器の鳥で中空。209は魚形の装飾を型取って焼いた土製品。210～214は土錘である。

Fig.27に出土銅銭をまとめた。中国銭3枚、半銭1枚以外は全て寛永通宝である。

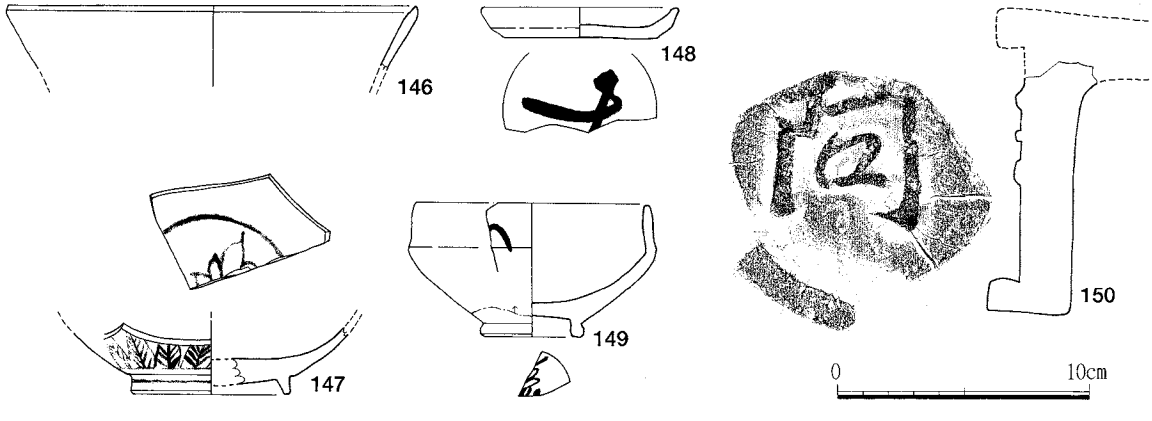


Fig.25　その他の遺物実測図・Ⅰ（1/3）

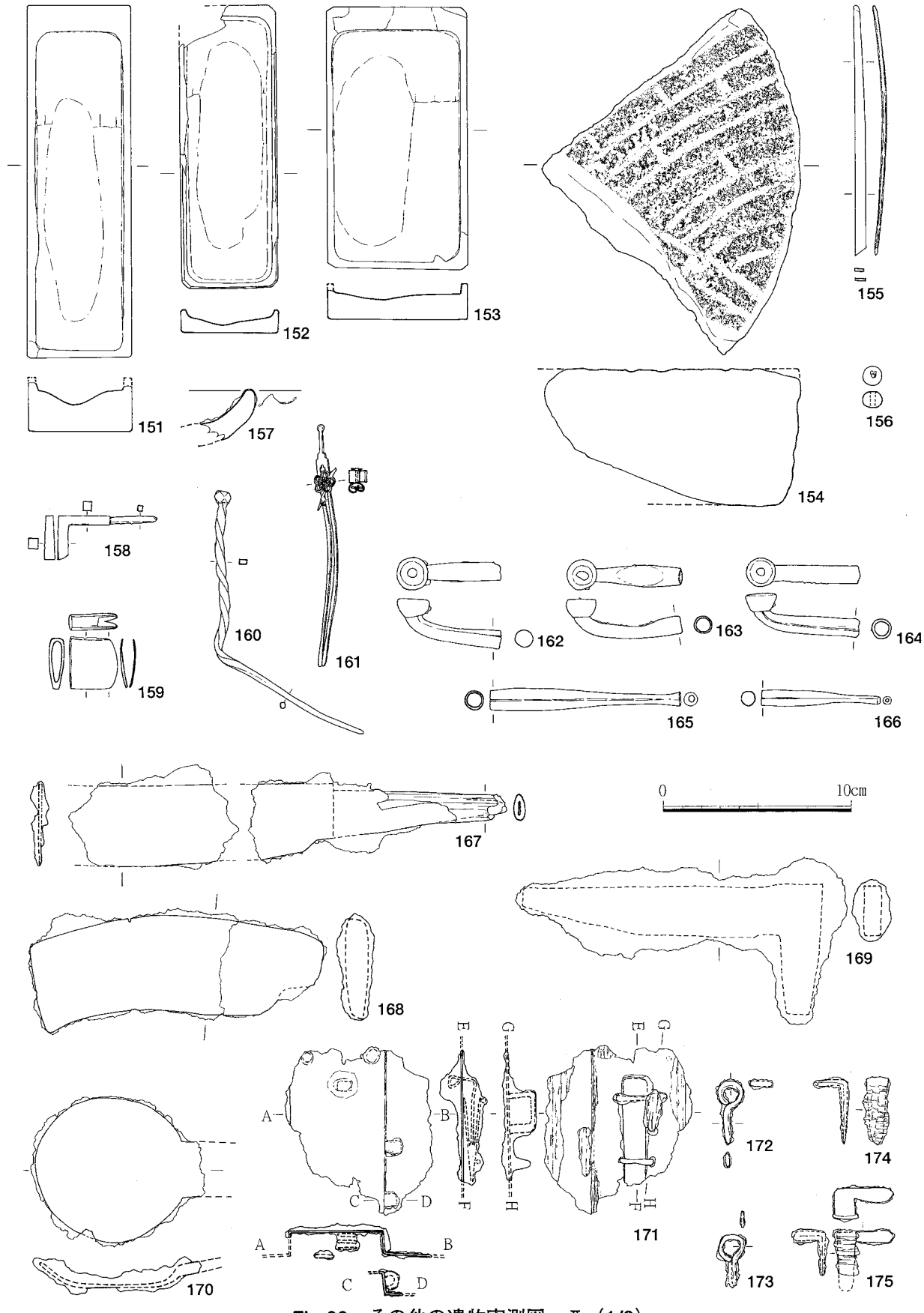
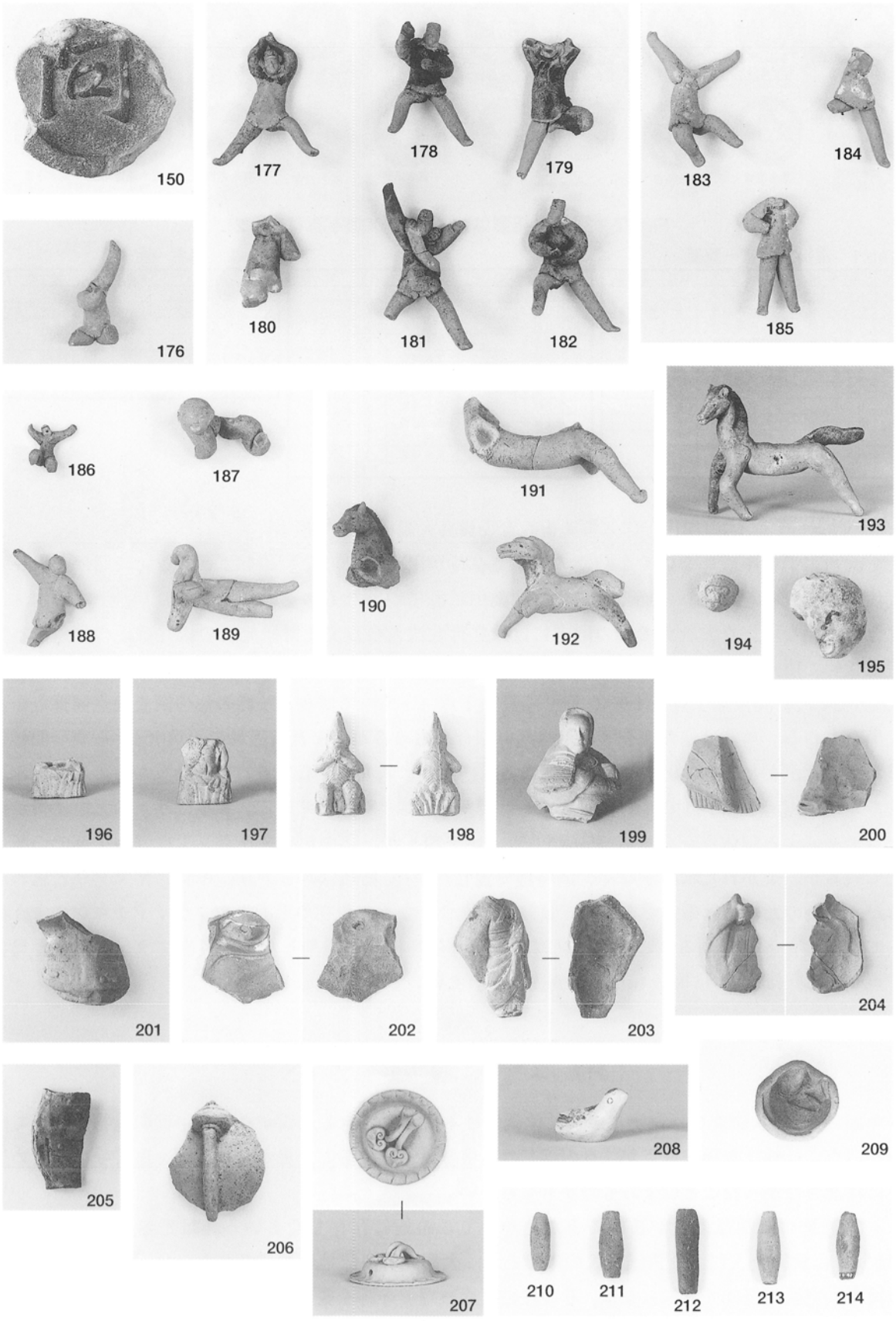


Fig.26　その他の遺物実測図・Ⅱ（1/3）



Ph.17　その他の遺物（縮尺不同）

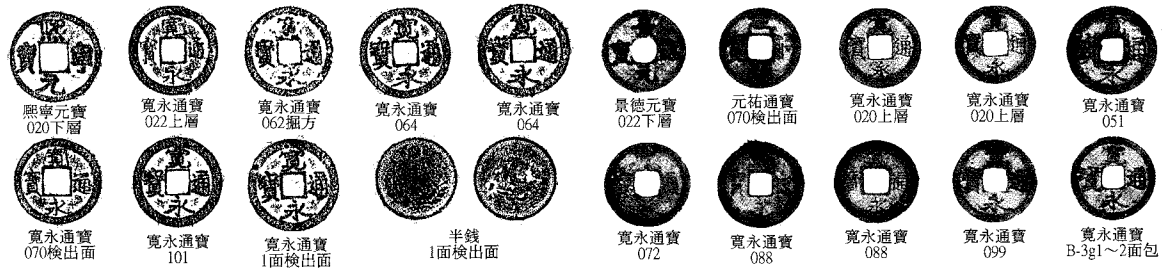


Fig.27　銅銭（拓影は1/2、透過X線写真は約1/2）

Tab.1　遺構別銭貨一覧表

面	遺構番号	銭貨名	枚数	備考
1	001	寛永通寶	1	
1	020上層	寛永通寶	3	背「足」含む
1	020下層	熙寧元寶	1	
1	022上層	寛永通寶	1	
1	022下層	景徳元寶	1	
1	025	寛永通寶	1	
1	038	寛永通寶	1	
1	051	寛永通寶	1	
1	062掘方	寛永通寶	1	
2	064	寛永通寶	2	
2	070検出面	寛永通寶	1	
		元祐通寶	1	
2	070	寛永通寶	1	
2	072	寛永通寶	1	
2	083	不明	1	
2	088	寛永通寶	2	
2	099	寛永通寶	2	
2	101	寛永通寶	1	
	1面東側検出面	寛永通寶	1	
	1区1面検出面	寛永通寶	4	
	1面検出面	寛永通寶	1	
		半銭	1	
	B-3g1～2面包	寛永通寶	1	
計			31	

Tab.2　銭名一覧表

銭貨名	初鋳年	時代	枚数
熙寧元寶	1068	宋	1
景徳元寶	1005	宋	1
元祐通寶	1093	宋	1
寛永通寶	1636	江戸	24
寛永通寶(背「足」)	1741	江戸	2
半銭／明治七年	1871	明治	1
不明			1

(6) 動物遺存体（屋山　洋／福岡市教育委員会大規模事業等担当）

1㎝角以下の小破片を除くと68点の動物遺存体が出土した。骨製品を２点含む。時期は近世～近現代（主に18世紀以降）である。遺物は掘削中に目についたものを取り上げており、土壌の水洗等は行っていない。なお、骨の種の同定には独立行政法人奈良文化財研究所の松井章氏の骨角標本を使用させて頂くと共に多大なご教示を頂いた。68点中哺乳類は18点（26%）、魚類32点（47%）、鳥類16点（24%）、爬虫類１点（１%）、同じく貝類１点（１%）で博多遺跡群の他の調査地点同様魚類が大半を占める。鳥類は他の調査区に比べ高い割合を占めるが、これは近世の土坑064から同一個体と思われる骨がまとまって出土したためである。内訳は、哺乳類がヒト６点（近世墓からの紛れ込み）、イルカ類３点、イヌ１点で、イルカ類とイヌは解体して食用としている。魚類はサメ類・エイ類が15点（ナタによる解体痕がある）、タイ類６点、フグ類４点。爬虫類はスッポン１点（中央部で切断されているが、焼かれた痕跡がなく、鍋料理で食したか）。鳥類はニワトリ、キジ、ヤマドリと思われるが、幼鳥のため種は確定できない。頭蓋骨と椎骨がなく、現在の手羽先やフライドチキンのようにして食したと考えられる。この他、柄に「最上」「歯楊枝」と線刻した牛骨製歯ブラシ、及び骨尺各１点がある。「最上」は等級もしくは製造者を示すものであろう。

第三章　おわりに

今回の第131次調査では確実に中世に位置付けることのできる遺構がなく、中世の遺物も極めて少なかった。これは本調査地点が「息の浜」の尾根線付近に位置し、海からの風雨を直接受けるため居住には適さなかったことによるものかもしれない。

一方近世の遺構は多数が確認できた。かつてこの地に存在したという「報光寺」は、承応三年（1654）に成誉上人により古渓上人の庵である「大同庵」の故地に創建されたという。その後報光寺は博多大空襲で焼けて廃寺となり、その後の区画整理で寺跡を縦断するような形で新しく道路が通された。もともとは調査地点西側の道路を中心とする一帯が寺域だったという。今回検出した17世紀の近世墓群は調査区の西側にのみ集中しており、この報光寺の初期の墓所に相当する可能性が強い。

付編　福岡市博多遺跡群第131次発掘調査出土の近世人骨

中橋孝博
九州大学大学院比較社会文化研究院

はじめに

博多は、港町・商都として古代に遡る古い歴史を持つ。その住民の骨格形質にどのような時代変化や地域性が見られるのか、それは生活環境と骨格形質の関係や変化要因を探る人類学上の重要課題とも関連したテーマであり、北部九州における興味深い課題の一つとなっている。これまで福岡市教育委員会によって長年にわたり発掘調査が続けられ、膨大な考古学的遺構、遺物と共に、人骨資料もまた着実に蓄積されつつあるが、2002年度の博多区奈良屋町における調査でも新たにまた10体の近世人骨が出土した。残念ながら保存不良のものが多く、得られた情報は限られたものであったが、以下にその所見を報告する。

遺跡・資料・方法

今回、発掘調査の対象地となったのは、福岡市博多区奈良屋町84、85番地である。2002年度の福岡市教育委員会による調査によって、表1に示す計10体の人骨が出土した。19号のみ近代に属すが、他はいずれも江戸時代のもので、副葬品などから、17世紀代の資料と考えられている。保存状態は不良で、計測値に基づく比較検討は一部の四肢骨に限られた。

計測はMartin-Saller（1957）に従った。また、性判定には筆者らの保存不良骨に対する方法（中橋、1988）を援用した。

表1．博多遺跡群第131次調査出土人骨

遺構番号	性	年齢	時代	埋葬施設	埋葬位	副葬品
１９	女性	成人	近代	（土坑）	－	なし
９４	男性	成人	１７世紀	桶	南西向き座葬	なし
９６	男性	熟年	１７世紀	木棺	北東頭位左側臥？	なし
９７	（女性）	成人	１７世紀	桶	不　明	なし
９９	女性	熟年	１７世紀	桶	南東向き座葬	陶磁器１、銭２
１００	男性	老年	１７世紀	木棺	北東頭位左側臥？	土師器２
１０１	女性	成人	１７世紀	桶？	北西向き座葬	土師器１
１０２	不明	熟年	１７世紀	桶？	不　明	なし
１１５	不明	熟年	１７世紀	桶	不　明	なし

所見

計測結果を、主な比較群と共に表2～4に示す。

男性上肢では96号人骨のみ計測値が得られた。上腕では三角筋粗面、尺骨では骨間縁の発達が良好で、骨体断面示数がかなり小さくなっている点が目立つ。同個体の下肢は遺存していないが、表2に示したように、下肢の特徴が判明した2体のうち、100号男性もまた、屈強な特徴を示し、その骨幹諸径は比較群の平均値を大きく上回っている。近世人としては珍しく粗線の発達も良好で、断面示数は縄文人に匹敵しており、いわゆる柱状大腿骨の外観を呈している。同個体の脛骨もまた扁平

性が顕著であり、近世人としては稀な四肢の特徴を持った男性例と言えよう。逆に94号はかなり華奢で、好対照の一例となっており、個体変異が大きい。

一方、女性では2体の下肢骨のみ計測値が得られ、それぞれ同じ博多の近世人である天福寺（中橋、1987）に比較的近い傾向を示している。

(病変)

96号男性人骨の右下顎枝内側面に、異常な骨増殖像が見られた。骨の保存状態が悪く、その詳しい病体は掴み難いが、右下顎枝内側面にかなり大きく不整な骨瘤（一部は5cm以上）が付着しており、何らかの要因による炎症性の変化と考えられる。頭蓋の他の部分が遺存していないので確認できないが、位置関係から判断して、上顎骨ないしは蝶形骨の一部が癒合した可能性も考えられる。また外傷に因る変化の可能性も否定できないが、少なくとも下顎枝外側面にその痕跡は認められない。

以上、今回の出土例は保存状態が悪く、その詳しい特徴は不明であったが、今後とも博多は、一千年以上に及ぶ歴史を持つ街の、しかも多くの記録資料を伴った人骨資料が得られる可能性を秘めた、人類学上の貴重なフィールドになっていくものと期待される。

謝辞

当人骨を分析するにあたり、色々とご教示いただいた福岡市教育委員会の関係各位に深謝します。

文献

阿部英世（1955）：「現代九州人大腿骨の人類学的研究」、人類学研究2。
遠藤萬里・北條輝幸・木村賛（1967）：「四肢骨」、増上寺徳川将軍墓とその遺品・遺体」、鈴木、他編、東京大学出版会。
鑄鍋命達（1955）：「九州人下腿骨の研究」、人類学研究2。
Martin-Saller（1957）:Lehrbuch der Anthropologie. Bd.I.Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.
溝口静男（1957）：「現代九州目本人前腕骨の人類学的研究」、人類学研究4。
中橋孝博（1987）：「福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨」、人類学雑誌95。
中橋孝博（1988）：「古人骨の性判定法」、日本民族・文化の生成（永井昌文教授退官記念論文集）、六興出版。
中橋孝博（1993）：「福岡市席田青木遺跡出土の弥生・近世人骨」、福岡市埋蔵文化財調査報告書第356集。
中橋孝博・永井昌文（1985）：「山口県吉母浜遺跡出土人骨」、吉母浜遺跡、下関市教育委員会。
立志悟郎（1970）：「熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人、上肢骨の人類学的研究、下肢骨の人類学的研究」、熊本医学会雑誌40。
専頭時義（1957）：「現代九州日本人上腕骨の人類学的研究」、人類学研究4。
脇達也（1970）：「熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人頭骨の研究」、熊本医学会雑誌44。

表 2　下肢骨計測値（男性）

		博多131 (近世)		席田青木[1] (近世)		天福寺[2] (近世)		桑島[3] (近世)		江戸[4] (近世)		吉母[5] (中世)		九州[6] (現代)	
Martin No.		94号	100号	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨															
1	最大長	−	−	31	419.6	20	415.2	11	419.8	−	413.8	18	419.1	59	406.5
2	自然位長	−	−	13	418.0	18	410.0	11	416.7	−	410.3	15	418.1	59	403.2
6	中央矢状径	25	30	40	28.1	17	27.7	16	27.1	−	28.3	19	28.1	59	26.5
7	中央横径	24	27	40	29.0	17	26.9	16	25.2	−	27.4	19	27.7	59	25.6
8	中央周	79	99	39	89.4	17	85.4	14	84.0	−	87.2	19	87.8	59	82.4
9	骨体上横径	−	31	38	33.8	14	30.4	14	30.2	−	30.7	19	32.1	59	29.4
10	骨体上矢状径	−	22	38	25.7	14	26.3	14	23.3	−	27.8	19	24.1	59	24.3
8/2	長厚示数	−	−	12	21.5	13	20.5	11	20.3	−	21.3	14	21.2	59	20.4
6/7	中央断面示数	104.1	111.1	40	97.0	17	104.1	16	107.9	−	103.9	19	101.3	58	103.8
10/9	上骨体断面示数	−	−	30	76.2	14	86.7	14	77.3	−	91.2	19	76.1	58	82.8
脛骨															
1	全長	−	−	21	330.3	13	339.5	12	333.4	−	327.1	12	341.9	61	320.3
1a	最大長	−	−	24	337.0	16	340.1	12	339.5	−	331.2	11	348.0	60	326.9
8	中央最大径	−	−	26	30.2	14	29.4	16	27.5	−	28.9	20	29.6	61	27.8
8a	栄養孔位最大径	−	33	34	34.4	15	33.7	−	−	−	32.9	20	33.8	60	30.6
9	中央横径	−	−	26	22.7	14	21.9	17	20.4	−	21.6	20	21.6	61	21.1
9a	栄養孔位横径	−	21	34	24.9	15	24.1	−	−	−	23.7	20	24.0	61	23.7
10	骨体周	−	−	25	83.0	14	80.4	17	80.5	−	79.4	20	80.8	62	78.4
10a	栄養孔位周	−	86	32	93.0	15	91.3	17	89.7	−	89.3	20	90.8	61	88.9
10b	最小周	−	−	29	76.0	15	73.7	17	73.3	−	70.8	20	74.5	60	71.3
9/8	中央断面示数	−	−	26	75.4	14	74.8	17	74.2	−	74.9	20	73.0	61	76.1
9a/8a	栄養孔位断面示数	−	63.6	34	72.3	15	71.9	−	−	−	72.2	20	71.0	60	77.5
10b/1	長厚示数	−	−	19	23.0	8	21.3	12	22.5	−	21.7	12	22.0	60	22.4

1）中橋（1993）、2）中橋（1987）、3）立志（1970）、4）遠藤、他（1967）、5）中橋·永井（1985）、6）阿部（1955）、鑄鍋（1955）

表 3　上肢骨計測値（男性）

Martin No.		博多131（近世） 96号	席田青木（近世） N	M	天福寺（近世） N	M	桑島（近世） N	M	江戸（近世） N	M	吉母（中世） N	M	九州[1)]（現代） N	M
上腕骨														
1	最大長	−	18	296.6	21	296.9	10	293.6	−	296.8	14	295.8	106	295.3
2	全　長	−	16	292.6	19	293.3	10	293.0	−	292.8	14	291.6	106	290.6
5	中央最大径	26	30	24.1	22	22.9	14	20.8	−	22.7	20	22.6	106	21.9
6	中央最小径	16	30	18.6	22	17.7	14	15.9	−	17.7	20	17.6	106	16.9
7	骨体最小周	62	28	67.1	22	63.8	14	62.4	−	63.5	20	62.5	106	61.8
7a	中央周	70	30	70.0	22	66.5	14	67.0	−	69.4	20	66.1	106	63.7
6/5	骨体断面示数	61.5	30	77.3	22	77.6	14	76.5	−	78.3	20	78.1	106	79.1
7/1	長厚示数	−	17	22.6	16	21.3	10	21.6	−	21.4	14	21.4	106	20.9
尺骨														
1	最大長	−	15	249.8	18	244.6	−	−	−	242.1	14	247.4	62	236.2
2	機能長	−	13	222.6	18	214.6	−	−	−	211.2	12	217.5	64	209.2
3	最小周	−	18	40.4	20	37.5	−	−	−	36.4	17	37.5	65	35.8
11	矢状径	12	30	13.6	24	13.1	−	−	−	12.8	19	12.8	63	12.8
12	横径	18	30	17.6	24	17.0	−	−	−	16.2	19	12.8	64	16.5
3/2	長厚示数	−	12	18.3	18	17.5	−	−	−	17.2	11	17.9	63	17.0
11/12	骨体断面示数	66.7	30	77.7	23	77.9	−	−	−	79.0	19	73.7	63	74.9

1) 専藤(1957)、溝口(1957)

表 4　下肢骨計測値（女性）

Martin No.		博多131（近世） 99号	101号	天福寺（近世） N	M	桑島（近世） N	M	江戸（近世） N	M	吉母（中世） N	M	九州（現代） N	M
大腿骨													
1	最大長	−	−	18	380.6	7	397.7	−	377.9	25	378.0	13	380.1
2	自然位長	−	−	16	376.7	7	393.1	−	374.4	24	375.8	13	375.9
6	中央矢状径	23	23	21	23.6	7	24.5	−	24.8	28	23.3	13	23.6
7	中央横径	24	25	21	24.0	7	23.4	−	24.1	28	24.8	13	23.2
8	中央周	74	76	21	75.2	7	75.8	−	76.9	28	76.1	13	74.2
9	骨体上横径	27	29	17	27.7	7	26.9	−	26.5	28	29.1	13	27.5
10	骨体上矢状径	20	22	17	22.7	7	20.8	−	25.5	28	20.9	13	21.3
8/2	長厚示数	−	−	15	19.8	7	19.3	−	20.5	24	20.4	13	19.8
6/7	中央断面示数	95.8	92.0	21	98.7	7	104.6	−	103.1	28	94.5	13	102.0
10/9	上骨体断面示数	74.1	75.9	17	82.3	7	77.9	−	97.3	28	72.0	13	77.1

博　多　92
－博多遺跡群第131次調査報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第763集
2003年(平成15年) 3 月31日
発　　行　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神 1 丁目 8 － 1
印　　刷　大野印刷株式会社
　　福岡市博多区榎田 2 丁目 2 －65